1『ミスター・ムーンライト』成井豊

○ジャンル／ファンタジー
○ストーリー／鹿島は図書館で司書をしているが、本当は作家志望。徹夜で小説を書いたせいで、風邪を引いてしまい、館長に早退を命じられる。鹿島は自宅のアパートで床につく。ところがその一時間後、鹿島は大学時代の友人・結城の家に姿を現す。迎えに出た結城の妻・都に、自分は半年前に交通事故で亡くなった、結城の妹のかすみだと名乗る。かすみは鹿島の体を借りて、結城に会いに来たのだった……。
○注／この作品は、筒井頼子作・林明子絵『あさえとちいさいいもうとのにゅういん』（福音館書店）を引用しています。
○出演者／男７＋女８＝計 15
○上演時間／１２０分

登場人物

鹿島　（図書館司書）
石岡　（刑事）
結城　（大学助教授）
都　（結城の妻・翻訳業）
あかり　（図書館司書）
利根川　（図書館長）
樹里　（図書館司書）
千草　（鹿島の妹・ＯＬ）
取手係長　（刑事）
竜ヶ崎　（刑事）

葉月　（大学２年）
古河　（大学２年）
明神先生（精神科医）
虹子　（大学４年）
かすみ　（結城の妹・大学２年）

月が昇る。月の光に照らされて、十五の影が浮かび上がる。影たちがゆっくりと動き出す。まるで、月の光に操られる、人形のように。やがて、影たちはバラバラに動き始める。そして、去る。

九月六日夕、豊島区立東池袋図書館。館長の利根川、司書のあかり・樹里がカウンターの中で仕事をしている。大学生の葉月・古河・虹子・かすみがそれぞれの場所で本を読んでいる。

あかり　月の光には不思議な力があると言われています。たとえば、人の心を狂わせるとか。実際、満月の夜は交通事故が多い。アポロが月面に降り立って、私たちは月がただの岩の塊だということを知ってしまった。それなのに、事故の数は変わらない。月の光には、科学では説明できない、何かがあるのかもしれません。私がそう思うようになったのは――

利根川があかりに歩み寄る。

利根川　ねえねえ、あかり君。鹿島君はどこ？

あかり　さあ。またトイレじゃないですか。

利根川　トイレ？　さっき行ったばっかりなのに？

あかり　朝からお腹の調子が悪いんですよ。昨夜、徹夜しちゃったみたいで。
利根川　また、これ？（とパソコンを打つマネ）
あかり　ええ。珍しく、筆が走ったらしくて。
利根川　今度はどんな小説？　タイムマシンが爆発したとか、アンドロイドが爆発したとか、また訳のわからないヤツ？
あかり　たぶん。コンクールの締切が近いんだそうです。
利根川　去年も一昨年も落ちたのに、まだ諦めてなかったんだ。
あかり　去年は最終審査まで残ったんですよ。出版社の人に、「ぜひ来年も応募してください」って言われたんですって。
利根川　夢を追いかけるのもいいけど、仕事はちゃんとしてもらわないと。そうでなくても、人手不足で忙しいんだから。樹里君。
樹里　はーい。
利根川　そんな所でサボってないで、仕事をしなさい。君の仕事は、人に本を読んでもらうこと。君が読んで、どうするの。
樹里　はーい。
あかり　（利根川に）鹿島君の様子、見てきましょうか？
利根川　いや、君はここにいてくれないと。僕には、君だけが頼りなんだから。樹里君、トイレに行って、鹿島君の様子を見てきて。
樹里　私に、男子トイレに入れって言うんですか？
利根川　入らなくていい。外から、声をかけるの。館長が呼んでますよって。

樹里が去る。そこへ、石岡がやってくる。本を一冊、持っている。

石岡　（あかりに本を差し出して）これ、返却。
あかり　（受け取って）はい。
石岡　君が勧めるだけあって、なかなかおもしろかったよ。最後まで犯人がわからなかったし。
あかり　そうですか。
石岡　今度は何を借りていこうかな。そうだ。同じ作者のヤツで、他にいいのはないかな。
あかり　（本を差し出して）はい。
石岡　え？
あかり　そう言うだろうと思って、用意しておきました。はい。
石岡　あ、ありがとう。（と受け取って）俺のために、わざわざ？
あかり　仕事ですから。
石岡　よかったら、今夜、食事でもどう？
あかり　残念ですけど、先約があるんで。
石岡　じゃ、明日の夜は。この本のお礼をしたいし。
あかり　その必要はありません。
石岡　しかし……。
利根川　（石岡に歩み寄って）あなた、もしかして、あかり君に気があるんですか？
石岡　いや、俺は別に。
利根川　ごまかしても無駄です。あなたは昨日も一昨日も、あかり君を食事に誘っていた。そして、昨日も一昨日も断られた。あなたは本を借りるために、ここに来てるんじゃない。あかり君を我が物にするためなんだ。
石岡　違う。

利根川　じゃ、この本の犯人は誰です。読んだなら、答えられるはずだ。
石岡　犯人は……。
利根川　犯人は？
石岡　犯人は……。

そこへ、鹿島・樹里がやってくる。

樹里　館長、呼んできました。
鹿島　（利根川に）すいません。朝からちょっと下痢気味で。
利根川　昨夜、徹夜したんだって？
鹿島　最初は十二時までで終わりにするつもりだったんです。でも、その五分前に、いいアイディアが浮かんじゃって。で、一時まで延長することにしたら、また五分前に、いいアイディアが浮かんじゃって———
利根川　それ以上、言わなくていい。君が作家志望だということは、私もよく知ってます。しかし、図書館の仕事に支障をきたすようなマネは困る。
鹿島　すいません。
あかり　（鹿島の額を触って）イヤだ。熱があるじゃない。
利根川　え？（と鹿島の額を触って）いや、大したことはないでしょう。
あかり　でも、三十七度は確実にありますよ。顔色もよくないし、明らかに、風邪の初期症状です。（鹿島に）家に帰って、寝た方がいいんじゃない？
利根川　それはダメだ。風邪を引いたのは、自分のせいじゃないか。
あかり　下手をしてこじらせたら、何日も休むことになりますよ。
利根川　それはもっとダメだ。

鹿島　大丈夫です。閉館まで、あと一時間だし。僕が早退したら、他の人に迷惑がかかるし。

あかり　ここにいて、病原菌を撒き散らされた方が、よっぽど迷惑なの。いいから、さっさと帰りなさい。いいですね、館長？

利根川　（鹿島に）そのかわり、約束しなさい。「家に帰ったら、すぐに寝ます。小説は絶対に書きません」て。

鹿島　約束します。

あかり　ほら、カバン。（と差し出す）

鹿島　（受け取って）お先に失礼します。

鹿島が去る。

樹里　館長、私も早退していいですか？

利根川　ダメダメ。これ以上、人が減ったら、仕事にならない。

樹里　でも、私も今朝から風邪気味で。

利根川　君は夜遊びのしすぎです。どうせ朝まで飲んでたんでしょう？

樹里　でも、鹿島さんは、先週も先々週も早退したじゃないですか。鹿島さんだけ特別扱いなんて、狡いですよ。

石岡　あいつ、よく早退するの？

樹里　ええ。

石岡　先週早退したのって、何曜日？

樹里　休館日の次の日だったから、火曜日です。

石岡　じゃ、先々週は？

利根川　どうしてそんなこと聞くんですか？
石岡　いや、別に。
利根川　あなた、まさか、あかり君を諦めて、樹里君に？
石岡　違いますよ。じゃ、また明日。

次のあかりの科白の間に、利根川・樹里・葉月・古河・虹子・かすみが去る。

あかり　月の光には、科学では説明できない、何かがあるのかもしれません。私がそう思うようになったのは、鹿島君のせい。彼が経験したことは、まさに不思議としか言いようがない。その時は気がつかなかったけれど、目を閉じて浮かんでくる景色には、必ず月が。月が白く輝いていた。鹿島君は月の光を浴びて、行動を開始したのです。

あかりが去る。

九月六日夜、豊島区目白にある、結城のマンション。鹿島がやってくる。

鹿島　お兄さん？　お義姉さん？　何よ、いないの？　鍵もかけないで、どこに行ったのよ。本当に不用心なんだから。

そこへ、都がやってくる。鹿島を見て、立ち止まる。

都　誰？

鹿島　お義姉さん！

都　誰？

鹿島　私よ、私。かすみ。

都　どちらのかすみさんですか？

鹿島　お願いだから、落ち着いて聞いて。私は、見た目はむさ苦しい三十男に見えるかもしれない。でも、本当は――――

都　あなた、どうやって中に入ったんですか？

鹿島　玄関から。お義姉さん、また鍵をかけずに、外へ出たでしょう？

都　ちょっとゴミを捨てに行ってたんです。

鹿島　また？

都　またって何よ。
鹿島　ゴミは朝出す。夜のうちに出さない。そうしないと、カラスに突っ付かれて大変なことになるって、何度も言ったのに。
都　誰が。
鹿島　私よ。お義姉さん、落ち着いて聞いて。私はかすみなの。
都　だから、どこの。
鹿島　ここの。この家の。あなたの旦那さんの妹の、結城かすみ。
都　ふざけないで。
鹿島　ふざけてない。
都　出ていって。今すぐ、ここから出ていってください。
鹿島　わかった、出ていく。でも、その前に話があるの。お兄さんは？　まだ帰ってきてないの？
都　（受話器を取って）警察に電話しますよ。
鹿島　やめて。私はお兄さんと話がしたいだけなの。（と都に歩み寄る）
都　こっちに来ないで。
鹿島　お願いだから、受話器を置いて。（と都の手をつかむ）

都が鹿島を突き飛ばす。鹿島が倒れる。そのまま、ジッと動かない。

都　ちょっと？　大丈夫ですか？

都が鹿島に恐る恐る近寄る。と、鹿島がむっくりと置き上がる。都が飛び退く。

鹿島　ここは？
都　は？
鹿島　ここはどこです。あなたは誰です。
都　あなたこそ誰です。
鹿島　僕は鹿島輝男。豊島区立東池袋図書館で、司書をしています。
都　司書の方が、うちに何の用です。
鹿島　うち？　ここはあなたの家なんですか？
都　そうです。
鹿島　おかしいな。家に帰って、布団に入ったはずなのに。
都　（カッターを出して）動かないで。
鹿島　何ですか、そんなものを出して。
都　女だからって、ナメないで。動いたら、切るから。
鹿島　物騒なこと、言わないでください。僕が何をしたっていうんです。
都　他人の家に勝手に入ったじゃない。あなた、泥棒なんでしょう？
鹿島　違いますよ。僕は本当に、ただの司書です。確かに、給料は安いけど、ちゃんと家計簿をつけて、無駄遣いしないようにしてる。だから、お金には困ってない。
都　じゃ、お金以外の物が目的だったんでしょう？
鹿島　お金以外の物って何です。女性の下着ですか？
都　やっぱり、それが目的だったのね？
鹿島　違いますよ。今のは、あなたが誘導尋問をしたから。
都　手を挙げて。早く。（とカッターを突き出す）
鹿島　挙げればいいんでしょう、挙げれば。（と両手を挙げる）

都　そのまま、ジッとしてて。（と受話器を取る）
鹿島　どこに電話するんです。
都　決まってるでしょう。警察よ。
鹿島　やめてください。僕は本当に泥棒じゃない。知らない間に、ここに来てたんです。すぐに帰りますから。
都　そんな言葉が信用できると思ってるの？
鹿島　しかし……。
都　あなたが泥棒じゃないなら、警察が来ても平気でしょう？　お巡りさんに、ちゃんと説明すればいいじゃない。
鹿島　それはそうですけど。

都が電話をかける。

都　もしもし。あ、私は結城都と申します。実は今、家に帰ってきたら、知らない男がいたんです。本人は泥棒じゃないって言ってるんですけど、一応、来てもらえますか？　住所は、豊島区目白――――

都が去る。

池袋警察署。刑事部捜査係長の取手、刑事の竜ヶ崎がやってくる。

取手係長　それで、目が覚めた時には、あの部屋にいたってわけ？
鹿島　そうです。すぐには信じてもらえないでしょうけど。実際、僕にも信じられなかったし。でも、僕は僕なりに考えてみたんです。なぜ僕はあの部屋にい

たのか。聞いてもらえますか？

取手係長　どうぞ。

鹿島　まず最初に考えられるのは、夢遊病です。僕は寝ている間に、服を着替えて、家を出て、あの部屋に行った。そして、突然、目が覚めたんです。

竜ヶ崎　おまえ、前にも夢遊病になったことがあるのか？

鹿島　いいえ、一度も。母に聞いたんですけど、僕は子供の頃から寝相がよくて、一度寝ると、ツタンカーメンのように動かなかったそうです。「この子、死んでるんじゃないかしら」って、何度も心配になったって。

取手係長　じゃ、夢遊病説はボツね。

鹿島　次に考えられるのは、記憶喪失です。僕はあの部屋に行こうと思って、家を出た。が、着いた途端に、記憶を失ったんです。

竜ヶ崎　あの部屋に行った目的は。

鹿島　覚えてません。何しろ、記憶を失ったんですから。

竜ヶ崎　しかし、目的がなかったら、行くはずがないだろう。

鹿島　そうなんですよね。でも、僕はあの女性には一度も会ったことがないし、結城都なんて名前も聞いたことがない。

取手係長　とすると、記憶喪失説もボツね。

鹿島　で、最後に考えられるのが、宇宙人誘拐説です。まあ、この説は、僕もほとんどありえないと思ってるんですが。一応、説明しましょうか？

取手係長　いいえ、もうたくさん。

そこへ、石岡がやってくる。

石岡　係長、ちょっと。
鹿島　あれ、あなた、うちの図書館によく来る人じゃないですか？

取手係長が石岡に歩み寄る。石岡が取手係長に耳打ちする。

取手係長　竜ヶ崎君、ちょっと。

竜ヶ崎が取手係長に歩み寄る。次の会話の間に、取手係長が耳打ちし、竜ヶ崎が去る。

鹿島　（石岡に）ねえ、そうでしょう？　そうですよね？
石岡　今度は、俺から幾つか質問させてもらおう。先週の火曜日、おまえは図書館を早退したな。
鹿島　先週の火曜日ですか？　ええ、たぶん。
石岡　早退したのは午後三時だ。その後、どこへ行った。
鹿島　真っ直ぐ家に帰りました。
石岡　本当か。
鹿島　嘘です。館長には、「家に帰って寝ろ」って言われたんですけど、途中で映画館に寄って、『猿の惑星』を見ました。
取手係長　それを証明する人間は？
鹿島　いません。一人で見たんで。
石岡　先々週の木曜日も早退したな。
鹿島　ええ。あの時は、熱が三十九度近くあって、すぐに病院に行ったんです。これは本当です。

石岡　知ってる。病院に行ったのは、午後一時だ。診察が終わった後はどうした。
鹿島　家に帰って、寝ました。でも、うちは両親も妹も勤めてるんで。
取手係長　（鹿島に）証明する人間はいないってことね？
鹿島　（石岡に）でも、どうしてそんなことを聞くんです。確かに、僕は早退が多い。館長には申し訳ないと思っています。でも、それが何かの罪になるんですか？　早退罪ですか？
取手係長　最近、うちの管内で、窃盗事件が多発していてね。それがみんな、同一の犯人によるものらしいの。なぜかというと、その犯人は、盗みを働いても、すぐに逃げない。玄関で待ち伏せしていて、その家の人が帰ってくると、殴る。殴ってから、逃げるの。
石岡　（鹿島に）殴りながら、いろんなことを言うらしい。「ちゃんと掃除しろ」とか、「カップラーメンばっかり食うな」とか。
取手係長　（鹿島に）あなたも、あの奥さんに言ったらしいわね。「ゴミは朝出す。夜のうちに出さない」って。
鹿島　さあ。
石岡　その連続窃盗犯の人相が、おまえにそっくりなんだ。

そこへ、竜ヶ崎がやってくる。

竜ヶ崎　係長、被害者の夫がそいつと話をしたいって言ってるんですが。
取手課長　仕方ないわね。（外に向かって）どうぞ、お入りください。

そこへ、結城・都がやってくる。

結城　鹿島。
鹿島　結城、おまえ、どうしてここへ？
結城　都に電話をもらって、駆けつけたんだ。おまえ、都に泥棒扱いされたんだって？
都　（鹿島に）すいませんでした。この人のお友達だったなんて、知らなかったから。
取手係長　どういうことです？
結城　鹿島は、僕の大学時代の友人なんです。卒業してからはあまり会ってなかったけど。だから、家内も顔を知らなくて。
鹿島　え？　じゃ、この人はおまえの奥さんだったのか？
結城　三年前に結婚したんだ。
鹿島　どうして呼んでくれなかったんだ。
結城　式は身内だけでやったんだ。でも、「結婚しました」って葉書は、ちゃんと送ったぞ。
鹿島　思い出した。おまえが紋付袴で、Ｖサインをしてるヤツだ。じゃ、横でＶサインをしてた、文金高島田が――――
都　私なんです。
鹿島　そうだったんですか。洋服を着ると、別人ですね。
結城　何を言ってるんだ。おまえは洋服姿の都も見てるんだぞ。
鹿島　え、いつ？
結城　半年前の、かすみの葬式だ。おまえ、呼んでないのに、来てくれただろう。
鹿島　事故のこと、新聞に載ったじゃないか。それで、慌てて、おまえの家に電話

して、お母さんに聞いたんだ。
結城　あの日も、都は俺の横にいたんだ。忙しくて、紹介する暇はなかったけど。
取手係長　つまり、お二人が話をしたのは、今日が初めてってことですか？
都　ええ。だから、変な誤解をしちゃって。だって、部屋に入ったら、ヌーっと立ってるんだもの。
鹿島　そうか。あの部屋は、結城の家だったのか。
石岡　ちょっと待て。おまえは、あの部屋がこの人の家だって知らなかったのか？
鹿島　ええ。大学時代は土浦に住んでたから。（結城に）そうだよな？
結城　ああ。結婚した時、今のマンションに引っ越したんだ。
石岡　（鹿島に）じゃ、なぜあの部屋に行った。
鹿島　さあ。
石岡　言いたくないなら、俺が言ってやろう。おまえは盗みに行ったんだ。それがたまたま、友達の家だったんだ。
結城　刑事さん、よく考えてください。鹿島は家内に本名を名乗ったんですよ。泥棒がそんなことをしますか？
竜ヶ崎　それは、奥さんがカッターを出してからですよ。最初は、女のフリをして、ごまかそうとした。（都に）そうですよね？
結城　泥棒が、女のフリなんかするわけがない。（鹿島に）都を驚かすつもりだったんだろう？　そんなバカなことをするから、警察に誤解されるんだ。
石岡　誤解かどうかは、まだわからない。
結城　いや、今日の件は、単なる行き違いです。ご迷惑をかけて、申し訳ありませんでした。
竜ヶ崎　しかし、その男は不法侵入をした。不法侵入は立派な犯罪ですよ。

結城　僕たちは告訴しません。鹿島は僕に会いに来ただけなんだから。鹿島、帰ろう。せっかくだから、家に寄っていってくれ。

鹿島　え、でも……。

結城　久しぶりに、酒でも飲みながら、話をしよう。大学時代の話や、かすみの話を。

石岡　悪いが、そいつにはまだ聞きたいことがあるんだ。

結城　それはまた改めて、逮捕状を取ってからにしてください。それじゃ。

都　お騒がせして、すいませんでした。

鹿島・結城・都が去る。

石岡　いいんですか、係長。

取手係長　仕方ないでしょう、告訴しないって言ってるんだから。

石岡　しかし、あいつの人相は、連続窃盗犯にそっくりなんですよ。身長一七五センチから一八〇センチ、筋肉質、一見まじめそうだが、目つきは妙にいやらしい。

竜ヶ崎　話の中身もデタラメです。今まで、いろんな言い訳を聞いてきたけど、宇宙人誘拐説なんて初めてです。

取手係長　ＳＦでも読みすぎたんじゃないの？

竜ヶ崎　係長は、あの男の話を聞いて、怪しいと思わなかったんですか？

取手係長　怪しいっていうより、おかしいと思った。あんな男が窃盗なんかするかな。

石岡　とにかく、俺はあの男を調べます。

取手係長　いいでしょう。今の所、他に手がかりはないし。ただし、あまり荒っぽいマ

ネはしないようにね。

石岡・取手係長・竜ヶ崎が去る。

九月七日朝、豊島区東長崎にある、鹿島の家。鹿島がやってくる。

鹿島　母さん、どうして起こしてくれなかったんだよ。また遅刻じゃないか。母さん？　母さん？

そこへ、千草がやってくる。コーヒーカップと新聞を持っている。

千草　自分で寝過ごしたくせに、お母さんのせいにするんじゃないの。いい年をして。

鹿島　千草、母さんは？

千草　昨日から、お父さんとお出かけ。二泊三日で、奥日光紅葉狩りツアー。

鹿島　そうだった。じゃ、さっき、俺の頭を叩いたのは？

千草　私。「起こしてくれて、ありがとう」は？

鹿島　ありがとう。（と欠伸をして）ああ、眠い。一昨日、徹夜したからかな。まだ、寝足りない気がする。そのコーヒー、いいか？

千草　ダメ。

鹿島　いいだろう、一口ぐらい。

千草　これは私の分。お兄ちゃんの分も作っておいたから、自分でいれなさい。

鹿島　ケチ。
千草　よくそんなことが言えるね。まさかとは思うけど、昨夜のこと、覚えてないの？
鹿島　昨夜のこと？
千草　十二時過ぎに酔っ払って帰ってきて、大暴れしたでしょう？
鹿島　俺が？
千草　「水を持ってこい」とか、「服を脱がせろ」とか、私をマネージャーのように扱ったじゃない。本当に覚えてないの？
鹿島　覚えてる。その節は本当にお世話になりました。
千草　はい。（と手を出す）
鹿島　え？
千草　昨夜のマネージャー代。兄妹のよしみで、五千円に負けておくわ。
鹿島　兄妹のよしみで、ツケにしてくれ。
千草　給料日までしか待たないからね。でも、お兄ちゃんがお酒を飲んでくるなんて、珍しいね。しかも、あんなに酔うなんて。
鹿島　「ビール一杯しか飲めない」って言ったのに、「私の酒が飲めないのか」ってすごまれちゃって。
千草　誰に。
鹿島　結城の奥さんに。あの人、飲むと人が変わるんだ。
千草　結城って？
鹿島　俺の大学の時の友達だよ。昨日、警察で会ったんだ。
千草　警察？
鹿島　あ、いや、実は昨日、仕事の帰りに、道端で千円札を拾ってさ。すぐに、警

千草　察に届けに行ったんだ。そこへ、ちょうど、結城と奥さんが来て。
鹿島　二人は何しに来たの？
千草　道端で一万円札を拾ったらしい。それで、二人で届けに。
鹿島　すごい偶然ね。
千草　いや、俺も驚いたよ。で、久しぶりに飲もうっていうことになって、結城の家に行ったんだ。
鹿島　そうしたら、奥さんが酒乱だったってわけ。
千草　ああ。おまえ、結城のこと、覚えてないか？　家にも何度か来たんだぞ。
鹿島　どんな人？
千草　まじめなヤツだよ。工学部の建築学科で、橋の設計を研究してた。それが今じゃ、大学の助教授だってさ。俺たちぐらいの年で助教授なんて、かなりの出世だよな。
鹿島　お兄ちゃんとは大違いね。
千草　本当本当。あいつは大学の頃から、勉強家でさ。授業がない時は、いつも図書館で勉強してたんだ。俺たちが初めて会ったのも、図書館だったんだ。
鹿島　お兄ちゃん、小説を書いてたんでしょう？
千草　その通り。でも、アイディアに詰まって、ふと隣の席を見たら、隣のヤツが物理学の本を読んでるじゃないか。それで、つい声をかけたんだ。「ある人がテレポーテーションして、A地点からB地点に移動したとします。そのB地点に、たまたま犬がいたら、その人はどうなるんでしょう？」
鹿島　バカな質問。
千草　でも、結城はまじめに答えてくれた。一時間もかけて。
鹿島　そう。

千草が去る。鹿島はそれに気づかずに、話し続ける。

鹿島　あの頃、俺は迷ってたんだ。大学に入ったら、自分のやりたいことができる。そう思って入ったのに、コンパだ、旅行だ、学園祭だ。クラスのヤツらは群れることしか考えてない。かと言って、俺一人になる勇気もない。図書館に行って小説を書くのも、クラスのヤツらには内緒だったんだ。でも、結城は違った。自分のやりたいことをやっていた。やりたくないことは、絶対にしなかった。

そこへ、結城がやってくる。

結城　鹿島、大丈夫か？

鹿島　悪いな。あんなにご馳走になった上に、家まで送ってもらっちゃって。

結城　気にするな。都が迷惑をかけたお詫びだ。

鹿島　おまえ、変わってないな。大学時代と。

結城　そうかな。

鹿島　常に、自分の思い通りに行動する。迷いがない。俺はいまだに迷いっぱなしなのに。

結城　いや、俺だって、よく迷うさ。

鹿島　嘘つけ。

結城　鹿島、一つ聞きたいことがある。おまえが俺の家に来た目的は何だ。

鹿島　それが、覚えてないんだ。

結城　じゃ、なぜかすみのフリをした。自分がかすみだと名乗った。
鹿島　それも、覚えてないんだ。
結城　答えたくないなら、それでもいい。しかし、これだけは言っておく。かすみは俺のたった一人の妹だった。他人が余計な口出しをするな。
鹿島　余計な口出し？
結城　それだけだ。じゃあな。

結城が去る。

鹿島　待てよ、結城。余計な口出しって、どういう意味だ。俺が一体何をしたって言うんだ。

そこへ、千草がやってくる。バッグを持っている。

千草　お兄ちゃん、誰に向かって話してるの？
鹿島　え？　いや、何でもない。
千草　私、もう出かけるからね。お兄ちゃんも急がないと、本当に遅刻するよ。あ、そうだ。これ、お兄ちゃんの部屋の入り口の所に落ちてたよ。（と封筒を差し出す）
鹿島　（受け取って）「鹿島輝男様」？（裏を見て）誰からだろう。
千草　とぼけるんじゃないの。それ、女の人の字じゃない。まさか、お兄ちゃんがラブレターをもらうとはね。相手は誰？
鹿島　わからない。こんな物、もらった覚えはないんだ。

千草　ああ、そう。じゃ、マネージャー代は今日中に払ってね。行ってきます。

千草が去る。鹿島が手紙を読む。

鹿島　「前略、鹿島輝男様。いきなりこんな手紙を受け取って、さぞかし驚かれていることと思います。一体、誰が置いていったんだろうと。どうか心を落ち着けて、ゆっくりと読んでください。そして、私がこれから書くことを、どうか信じてください。私は結城かすみです」。（顔を上げて）嘘だ！

鹿島が去る。

九月七日昼、豊島区立東池袋図書館。利根川・あかり・樹里がカウンターの中で仕事をしている。虹子・かすみがそれぞれの　場所で本を読んでいる。

あかり　突然ですが、おはなし広場って知ってますか？　図書館によっては、おはなし会とか、えほんの広場って呼ぶ所もあるけど。来館した子供たちに、司書が絵本を読み聞かせたり、一緒に手遊びをしたりする、図書館の定例行事。我が豊島区立東池袋図書館では、週に二回、幼児向けと小学生向けに、行っています。

そこへ、明神先生がやってくる。

明神先生　今日のおはなし広場の担当は誰。

あかり　鹿島です。

明神先生　ああ、あの一番下手クソな人。

あかり　何回やっても、慣れなくて。でも、本人は一生懸命なんです。

明神先生　知ってるよ。彼を見ていると、こっちまでドキドキする。「頑張れ」って応援してやりたくなる。ふふふ。楽しみにしているよ。

明神先生が椅子に座って、本を読み始める。利根川があかりに歩み寄る。

利根川　ねえねえ、あかり君。今の人、あかり君の知り合い？

あかり　いいえ。何度か、話をしたことはありますけど。

利根川　最近、おはなし広場によく顔を出すよね？

あかり　子供たちの後ろに座って、ニコリともしないで聞いてます。

利根川　一体何を企んでるんだろう。

あかり　企むって？

利根川　だって、あんなおじさんが一人で来るなんて、おかしいじゃないか。たとえば、他の図書館の館長で、お話の上手な職員をスカウトしようと思っているとか。

あかり　まさか。単に暇なんですよ。会社を定年退職して、他にすることがないんでしょう。ねえ、樹里ちゃん？

樹里　私、おじさんには興味ありません。

利根川　樹里君、さっきの件なんだけど。

樹里　私、イヤですからね、ピンチヒッターなんて。

利根川　そう言わずに、頼むよ。君の次の担当の日は、鹿島君にやらせるから。

樹里　でも、いきなり言われても、何の準備もしてないし。

利根川　おいおい、笑わせないでくれよ。君が今まで一度でも準備をしたことがあるか？　いつも始まる五分前に絵本コーナーに行って、「どれにしようかな」って選ぶだけじゃないか。

樹里　私が言ってるのは、心の準備です。

利根川　なるほどね。子供たちと接するためには、汚れた心を清めなければいけない

樹里　わけだ。
あかり　館長は、私の心が汚れてるって言うんですか？
利根川　（利根川に）あの、よかったら、私がやりますけど。
あかり　でも、この前も、君がかわりにやったじゃないか。
利根川　気にしないでください。私、おはなし広場は大好きですから。
ありがとう、あかり君。やっぱり、頼りになるのは君だけだ。それにしても、
鹿島のヤツ、早退した次の日に遅刻とは、いい度胸じゃないか。

そこへ、石岡・竜ヶ崎がやってくる。石岡は本を一冊、持っている。

竜ヶ崎　すいません、鹿島さんは今、どちらに？
あかり　今日はまだ来てないんです。朝、電話があって、病院に寄ってから、来るって。もうそろそろだとは思うんですが。
竜ヶ崎　そうですか。
あかり　失礼ですが、どのようなご用件でしょう？
竜ヶ崎　それは直接、ご本人に。（石岡に）どうします？
石岡　仕方ない。本でも読んで、待つか。
竜ヶ崎　ええ。

竜ヶ崎が椅子に座って、本を読み始める。石岡があかりに歩み寄る。

石岡　（本を差し出して）これ、返却。
あかり　（受け取って）はい。

石岡　その本は、昨日のヤツより、ちょっと落ちるな。トリックも無理矢理って感じがしたし。

あかり　お気に召さなくて、申し訳ありません。

石岡　いや、別にそういう意味で言ったんじゃないんだ。文章はなかなか読みやすたっかし。で、今日も同じ人のを借りたいんだけど。

あかり　（本を差し出して）はい。

石岡　やっぱり用意しておいてくれたんだ。ありがとう。（と受け取る）

あかり　また、お気に召さないかもしれませんけど。

石岡　一応聞いておくけど、今夜は先約は？

あかり　あります。一応言っておきますけど、明日の夜も。

石岡　一回ぐらい、いいじゃないか。俺、ミステリーはまだ読み始めたばかりでね。だから、いろいろ教えてほしいんだ。

あかり　私、ミステリーはそんなに好きじゃないんです。時代小説のファンなんで。

石岡　なぜ最初にそれを教えてくれなかったんだ。

利根川　うちの職員に言い寄るのはやめてください。

石岡　だから、それは誤解だって言ってるだろう。俺はただ、この本のお礼がしたくて――

利根川　ほう。じゃ、この本の犯人は誰です。

石岡　主人公の親友の、平井太郎だ。

利根川　（あかりに）当たってる？

あかり　当たってます。

利根川　まさか、本当に読んでくるなんて。

石岡　おかげで、昨夜は徹夜だ。（あかりに）だから、一回だけでいい。一緒に食

事に行ってくれ。
石岡さん、俺たちはここへ何しに来たんですか？

竜ヶ崎　そこへ、鹿島がやってくる。

鹿島　おはようございます。
利根川　鹿島君、遅かったじゃないか。
鹿島　病院がムチャクチャ混んでて、二時間も待たされて。それなのに、診察はたったの五分です。それで、今度は薬局で待たされて。
利根川　で、風邪の具合はどうだったの？
鹿島　それがその、風邪というより、寝不足だろうって。
利根川　君、昨夜も徹夜したの？
鹿島　いいえ、ちゃんと寝ました。八時間近く寝たのに、何だか全然寝た気がしなくて。疲れも全然取れないんです。
竜ヶ崎　鹿島さん、ちょっといいですか。
鹿島　刑事さん、どうしてここへ？
利根川　刑事？（竜ヶ崎に）　あなた、刑事さんなんですか？
竜ヶ崎　（警察手帳を出して）池袋署の竜ヶ崎です。
あかり　（石岡に）じゃ、あなたも？
石岡　ああ。
利根川　刑事が勤務時間中にナンパするなんて。日本の警察はおしまいだ。
石岡　ナンパじゃない。俺は本気だ。毎日毎日、忙しい仕事の合間を縫って、会いに来てるんだ。

竜ヶ崎　石岡さん。
石岡　すまん。
竜ヶ崎　（鹿島に）幾つかお聞きしたいことがありましてね。少しお時間をいただけますか。
鹿島　なぜです。僕の容疑は晴れたんじゃないんですか？
竜ヶ崎　ええ。でも、念のためにもう一度。
利根川　鹿島君が何かしたんですか？
竜ヶ崎　いいえ。参考人として、捜査に協力していただきたいだけです。
利根川　協力ね。言っておきますけど、鹿島君は悪いことができるような人間じゃない。それは、上司の私が保証します。確かに、彼は遅刻や早退が多い。仕事中に居眠りもする。正直な話、勤務態度は最悪です。しかし、樹里君みたいに、私に逆らったりはしない。
樹里　館長は、私が悪い人間だって言いたいんですか？
あかり　まあまあ。館長、そろそろ、おはなし広場の時間ですけど。
利根川　もうそんな時間か。鹿島君、今日の担当は君だよ。
鹿島　わかってます。でも、刑事さんをお待たせするわけには……。
利根川　この人たちのことは気にしなくていい。君に容疑をかけるくらいだ。どうせ無能に決まってます。
竜ヶ崎　あなた、我々を愚弄するつもりですか？
利根川　冗談冗談。ほんの三十分で済みますから、本でも読んで、待っててください。さあ、鹿島君。（と腕をつかむ）

鹿島・利根川が去る。後を追って、明神先生も去る。

竜ヶ崎　いいんですか、石岡さん。
石岡　仕方ないだろう。せっかくだから、俺たちも聞かせてもらおうじゃないか。
竜ヶ崎　のんきなこと言っちゃって。
石岡　バカ。ヤツがどんな人間か、じっくり観察するんだよ。
あかり　あの、鹿島君の容疑って何なんですか？
石岡　悪いけど、言えないんだ。公務員の守秘義務ってヤツさ。
あかり　そう。教えてくれたら、食事に行ってあげようと思ったのに。
石岡　本当か？
竜ヶ崎　石岡さん。

石岡・あかり・樹里・竜ヶ崎・虹子・かすみが去る。
遊戯室。鹿島・利根川がやってくる。鹿島は本を、利根川は椅子を持っている。

利根川　（客席に向かって）お待たせしました。おはなし広場の時間ですよ。今日、みんなにお話をしてくれるのは、この人。鹿島輝男さんです。
鹿島　（客席に向かって）鹿島です。よろしく。
利根川　輝男お兄さん、今日はどんなお話をしてくれるの？
鹿島　この本を読みます。題名は、『あさえとちいさいいもうと』。
利根川　（客席に向かって）一体どんなお話かな。おもしろいお話だといいね。つまらなかったら、「つまらない」って言っていいんだよ。そうしたら、輝男お兄さん、死に物狂いで頑張るから。それじゃ、輝男お兄さん、よろしくね。

利根川が去る。鹿島が椅子に座る。

鹿島　（客席に向かって）じゃ、始めます。『あさえとちいさいいもうと』。「あさえがいえのまえであそんでいると、おかあさんがげんかんからでてきました。『あさえちゃん、おかあさんぎんこうにいってくるわ。すぐかえってくるからまっていてね』。え？　そうだな。貯金でも下ろしに行ったんじゃないか。いや、別に、お母さんの金遣いが荒いってわけじゃないと思うよ。「しばらくすると、げんかんのドアのむこうで、あやちゃんのなきごえがしました。あさえはとんでいって、ドアをあけました」。え？　ああ、「とんでいって」っていうのは、「飛ぶような速さで走っていって」って意味さ。本当に飛んだわけじゃないよ。あさえちゃんは魔女っ子メグちゃんじゃないんだから。わからない？　じゃ、お母さんに聞いてみて。「あさえはポケットからチョークをとりだして、みちにせんろをかきはじめました。『あやちゃん、しゅっぽしゅっぽ、しましょ』。今度は何？　どうしてお巡りさんに逮捕されなくちゃいけないの。チョークはすぐに消えるから、軽犯罪法違反にはならないの。君、軽犯罪法違反なんて言葉、よく知ってるね。幾つ？　あ、わかりました。先に進みます。「あやちゃんがいません。あさえはあわてました。きょろきょろあたりをみまわしましたが、あやちゃんはどこにもみえません」。違う。飛んだんじゃない。あやちゃんはキューティーハニーじゃないんだから。だから、逮捕されたんでもないの。あやちゃんは一人でどこかへ歩いていったの。ほら、みんな、こっちを向いて———

鹿島が倒れる。そこへ、利根川が飛び出す。鹿島に駆け寄る。

利根川　鹿島君！　鹿島君！

そこへ、あかり・石岡・竜ヶ崎が飛び出す。鹿島に駆け寄る。

あかり　どうしたんですか、館長？

利根川　いきなり倒れちゃって。（と鹿島を見て）ダメだ。気を失ってる。

竜ヶ崎　さっき、寝不足だって言ってましたよね？

あかり　昨日から、体の調子が悪かったんです。どうしましょう。

石岡　子供たちがびっくりしてる。とりあえず、外へ運ぼう。

利根川　（客席に向かって）みんな、ごめんね。輝男お兄さんは死んだんじゃないよ。ネンネしちゃっただけなんだ。ダメだよね、こんな所でネンネしちゃ。

そこへ、明神先生がやってくる。

明神先生　そこをどけ。

利根川　（避けて）うわっ。何ですか、あなたは。

明神先生　（鹿島のまぶたを開けて）うん。意識はない。

利根川　そんなことは最初からわかってますよ。樹里君！　樹里君！

そこへ、樹里がやってくる。

樹里　何ですか？

利根川　急いで、バケツに水を入れてきて。
あかり　そんなにいっぱい、何に使うんです。
利根川　ぶっかけるんだよ、頭から。そうすれば、すぐに目を覚ます。
明神先生　いや、しばらくこのまま寝かせた方がいい。事務所にソファーはあるかな？
利根川　勝手なことを言わないでください。あなた、一体何者です。
竜ヶ崎　お医者さんですよ。西大病院の。
利根川　え？　この人が？
明神先生　（樹里に）水と氷とタオル。あと、毛布を用意してくれ。
樹里　はい、ただいま。

樹里が去る。石岡・竜ヶ崎が鹿島を抱えて去る。利根川・明神先生も去る。

あかり　今日のおはなし広場には、幼稚園ぐらいの子供が十人ほど来ていました。鹿島君が運び出されるのを見て、泣き出す子、お母さんにしがみつく子、「大変だ、大変だ」と叫びながらその場をグルグル走り回る子。館長に後を任された私は、必死で子供たちをなだめ、本の続きを読み始めました。でも、誰も聞いてなかった。鹿島のバカ。

あかりが椅子を持って去る。

九月七日夕、豊島区目白にある、結城のマンション。都・葉月・古河がやってくる。葉月・古河はバイオリンケースを持っている。

都　大学から直接、来たの？

葉月　ええ。六時過ぎまで、練習があったんで。どうしてですか？

都　だって、それ。（とバイオリンケースを示す）

葉月　あ、これは家に寄って、置いてくるつもりだったんです。でも、練習が延びちゃったんで。やっぱり、途中で抜けてくればよかった。

都　あら、どうして？

葉月　だって、何だか不真面目じゃないですか。こんな物を持って、謝罪しに来るなんて。

都　そんなに難しく考えることないんじゃないかな。久しぶりに会って、話をする。それでいいじゃない。だから、私は普段着のままだし、部屋の掃除もしてない。

葉月　掃除はした方がいいんじゃないですか？

都　昨日したから大丈夫。ちょっと待っててね。何か飲み物を持ってくるから。（と行こうとする）

古河　あの、結城さんは？

都　（立ち止まって）それがその、実は、ついさっき、電話があってね。会議が長引いてるから、七時までには帰れそうもないって。

古河　そんな。

都　お二人にはくれぐれをお詫びするようにって。

古河　じゃ、また日を改めてってことですか？

都　本当に、ごめんなさい。

古河　でも、先週も同じだったじゃないですか。また日を改めてってことで、今日になったんですよ。

葉月　仕方ないでしょう、お仕事なんだから。

古河　それはわかってるけど、二回も土壇場でキャンセルされたら、疑いたくもなるじゃないか。（都に）結城さんは、僕らに会うつもりはないんじゃないですか？

都　そんなことはないと思うけど。

古河　正直に言ってください。結城さんは、本当に僕らに会うって言ったんですか？

都　ええ。

古河　都さんに言われて、仕方なくオーケイしたんでしょう？　本当は、僕らの顔なんか見たくもないんでしょう？

葉月　古河君、落ち着いて。

古河　確かに、事故を起こしたのは僕です。かすみさんが亡くなったのは、百パーセント、僕の責任です。

葉月　その話は何度もしたでしょう？　悪いのはあなただけじゃない。最初にスキーに行こうって言い出したのは私だし、あんな強行スケジュールを組んだのも私なの。

古河　でも、運転してたのは俺だ。俺さえしっかりしていれば、かすみは死ななくて済んだんだ。

葉月　やめてよ、古河君。都さんの前で、そんなこと言わないで。

古河　（都に）すいません。

都　あなたの気持ちはわかるけど、そこまで自分を責めることはないと思う。あなただって、大怪我をしたんだし。

古河　でも、僕は死ななかった。

都　一時は危篤状態だったんでしょう？　退院するまで、半年もかかったじゃない。

古河　でも、死ななかった。今の僕にできることは、謝ることだけなんです。一言でいいから、謝らせてほしいんです。

都　わかった。今、あなたが言ったこと、主人に話してみる。

古河　お願いします。

都　たくさんしゃべって、喉が乾いたでしょう。冷たい麦茶でも持ってくるわね。

都が去る。

古河　ごめん、興奮しちゃって。

葉月　私たちはここへ謝罪しに来たんだよ。それなのに、あんな大きな声を出して。横で見てたら、都さんの方が謝罪してるみたいだった。

古河　興奮してて、気づかなかった。

葉月　いい、古河君？　私たちに、文句を言う権利なんかないの。この家に入れてもらえただけでも、感謝しなくちゃいけないんだから。

古河　わかってる。でも、俺はどうしても結城さんに会いたいんだ。許せないなら許せないって言ってほしいんだ。

そこへ、鹿島が飛び出す。

鹿島　……古河君。
古河　え？
鹿島　古河君、お兄さんはどこ？
古河　あの、あなたは？
鹿島　私のことはどうでもいいの。ねえ、葉月、お兄さんは？
葉月　お兄さんて？
鹿島　結城正治に決まってるでしょう。いるの、いないの。早く答えて。

そこへ、都がやってくる。

都　鹿島さん、昨日はどうも。
鹿島　お義姉さん、昨日は驚かせてゴメンね。
都　どうしたんですか、そんなしゃべり方をして。
鹿島　いけね。都さん、結城は？
都　まだ帰ってません。
鹿島　ということは、大学か。葉月、古河君、またね。

鹿島が去る。

都　何よ。いきなり来て、いきなり帰って。
古河　今の人は？
都　主人の大学時代の友達。東池袋図書館で、司書をしてるんだって。
古河　何だか言葉遣いが変でしたね。
都　でしょう？　昨日、来た時もああだったの。いきなり、「私はかすみよ」って言い出して。
葉月　かすみって名乗ったんですか？
都　ええ。たぶん、冗談だったんだと思うけど。

電話が鳴る。都が受話器を取る。別の場所に、石岡が現れる。受話器を持っている。

都　はい、結城です。
石岡　池袋署の石岡です。失礼ですが、そちらに鹿島は行ってませんか。
都　ええ、たった今、ここへ来ました。
石岡　本当ですか？　じゃ、まだそこにいるんですね？
都　いいえ。主人に会いに来たみたいだったんですが、まだ大学にいるって言ったら、すぐに出ていきました。
石岡　そうですか。ありがとうございました。

都が電話を切る。都・葉月・古河が去る。
豊島区立東池袋図書館。あかり・利根川・樹里・竜ヶ崎がやってくる。

竜ヶ崎　どこに電話したんです？
石岡　結城の家だ。鹿島のヤツが現れたそうだ。たった今。
利根川　結城って誰です。
石岡　鹿島の大学時代の友人です。
利根川　あのバカ、仕事を抜け出して、友達の家に遊びに行ったのか。
石岡　違いますよ。俺たちに尋問されるのがイヤで、逃げたんだ。
竜ヶ崎　でも、どうして結城の家に行ったとわかったんです。
石岡　推理したんだよ。ミステリーを読んだら、すっかり推理力がついた。（あかりに）みんな、君のおかげだよ。
あかり　まだ一冊しか読んでないくせに。
竜ヶ崎　わからない。一度失敗した家に、なぜもう一度行くんだ。
石岡　結城に会うためさ。行くぞ、竜ヶ崎。
竜ヶ崎　結城の家ですね？
石岡　違う。結城の勤め先の、鉄橋大学だ。

石岡・竜ヶ崎が去る。

利根川　あかり君、僕は間違ってたのかな？　鹿島君は、やっぱり連続窃盗犯なのかな？
あかり　あの人に、そんな大それたことができるわけないでしょう？　黙って出ていったのは、何か別の理由ですよ。
利根川　樹里君、君はどう思う。
樹里　私が言うのもなんですけど、話を止めて、仕事をした方がいいと思います。

あかり・利根川・樹里が去る。
鉄橋大学工学部にある、結城の研究室。鹿島がやってくる。

鹿島　お兄さん？　お兄さん？　どうして研究室にいないのよ。もしかして、入れ違いになったのかな。もう、勘弁してよ。

鹿島が椅子に座る。そこへ、結城がやってくる。

結城　鹿島、なぜおまえがここにいるんだ。俺に何か用か？
鹿島　お兄さん。
結城　今、何て言った。
鹿島　お兄さん、私は鹿島さんじゃないの。かすみなの。
結城　何だと？
鹿島　鹿島さんの体を借りて、お兄さんに会いに来たの。どうしても話がしたくて。
結城　出ていけ。
鹿島　お兄さん。
結城　今すぐ、ここから出ていけ。さもないと、警備員を呼ぶぞ。
鹿島　五分でいいから、時間をちょうだい。話をしたら、すぐに出ていくから。
結城　鹿島、おまえ、自分が何をやってるのか、わかってるのか？
鹿島　だから、私はかすみなんだってば。
結城　いい年をした男が、女みたいな口のきき方をして。恥ずかしいとは思わないのか？

鹿島　思わない。鹿島さんには悪いけど、私には男のフリなんてできないもの。
結城　都に頼まれたのか。
鹿島　違う。
結城　隠しても無駄だ。都もおまえと同じことをした。かすみのフリをして、俺を説得しようとした。
鹿島　それは、お兄さんの誤解よ。お義姉さんは何も知らないの。
結城　嘘だ。
鹿島　嘘じゃない。一昨日の夜、お兄さんと話をしたのは私なの。私が勝手にお義姉さんの体を借りたの。でも、お兄さんは信じてくれなかったじゃない。
結城　俺に言いたいことがあるなら、堂々と言えばいいんだ。かすみのフリなんかする必要はない。
鹿島　そうやって、すぐに決めつける。だから、鹿島さんの体を借りることにしたのよ。お兄さん、鹿島さんは私のことをよく知らない。最後に会ったのは、私が小学四年の時よ。そんな人に、どうして私のフリができるの？
結城　都に聞いたんだろう。それとも、ビデオでも見て、研究したのか。
鹿島　どうして鹿島さんがそんなことをするの。そんなことをして、何の得があるの。
結城　それは、俺の方が聞きたいな。鹿島、おまえはなぜそんなくだらない芝居をするんだ。大学時代は、もっとまじめなヤツだったのに。
鹿島　鹿島さんじゃないからよ。私はかすみなの。
結城　五分経ったぞ。かわいそうだが、警備員を呼ばせてもらう。
鹿島　待って。
結城　捕まるのがイヤなら、今すぐ、出ていけ。

鹿島　（結城の腕をつかんで）お兄さん、古河君を許してあげて。
結城　放せ。
鹿島　私が死んだのは、古河君のせいじゃない。ただの事故だったのよ。
結城　放せ、鹿島。
鹿島　放さない。お兄さんが「許す」って言うまでは。

結城が鹿島の手を振り払う。が、鹿島はまた結城の腕をつかむ。そこへ、石岡・竜ヶ崎がやってくる。

石岡　鹿島、その人を放せ。

鹿島が結城を突き飛ばす。結城が倒れる。竜ヶ崎が結城に駆け寄る。

竜ヶ崎　大丈夫ですか、結城さん。
結城　ええ。
石岡　（鹿島に）傷害の現行犯だ。両手を出せ。
鹿島　違う。私はただ、話がしたくて――――
石岡　つべこべ言わずに、両手を出せ。早く。

鹿島が逃げようとする。石岡が鹿島をつかみ、殴る。鹿島が倒れる。竜ヶ崎が鹿島に駆け寄る。

竜ヶ崎　失神してますよ。

石岡　　だろうな。本気で殴ったから。
竜ヶ崎　　石岡さん、やりすぎですよ。係長にクギを刺されたのに。
　と、鹿島がむっくりと起き上がる。竜ヶ崎が飛び退く。
鹿島　　ここは？
　竜ヶ崎が鹿島を抱き起こし、椅子に座らせる。石岡・結城が去る。

九月七日夜、池袋警察署。取手係長がやってくる。

取手係長　それじゃ、結城さんの研究室に行った覚えはないって言うの？

鹿島　ええ。僕はおはなし広場で絵本を読んでたんです。でも、途中で、子供たちが騒ぎ始めて、それから……。

竜ヶ崎　気を失って、床に倒れたんだ。そのままにしておくわけにも行かないから、俺と石岡さんが応接室に運んだ。

鹿島　重かったでしょう？

竜ヶ崎　ああ。目が覚めるまで待つことにして、俺たちは事務室に行った。そこで、他の職員から事情聴取をしたんだ。一時間ほどして、応接室を覗いたら、おまえの姿はなかった。

取手係長　なるほど、これではっきりしたわね。

竜ヶ崎　何がですか？

取手係長　昨日、この人が話した、三つの説を覚えてる？

竜ヶ崎　夢遊病説と、記憶喪失説と、宇宙人誘拐説ですか？

取手係長　昨日の事件と今日の事件には、共通点がある。それは、事件が起こる前、この人が寝ていたってことよ。そこから導き出される答えは？

竜ヶ崎　夢遊病説ですか？

取手係長　その通り。
竜ヶ崎　しかし、こいつは子供の頃から寝相がよかったんですよ。
取手係長　大人になれば、体格が変わる。それで、寝相も悪くなったのよ。
竜ヶ崎　本気ですか、係長？
取手係長　まさか。この人の話を聞いてたら、バカバカしくなっちゃって。もう夢遊病説でいいやって思っちゃったの。

そこへ、石岡がやってくる。

石岡　係長、結城は今日も告訴しないそうです。「穏便に取り計らってほしい」。そう言い残して、帰りました。
取手係長　でも、これはれっきとした傷害事件なのよ。
石岡　しかし、こいつは突き飛ばしただけです。結城はかすり傷一つ負ってない。
竜ヶ崎　むしろ、怪我をしたのは、こいつの方です。
鹿島　そう言えば、顎の辺りがジンジンする。まるで、誰かに殴られたような。
石岡　気のせいだろう。
取手係長　石岡君、あなた、まさか。
鹿島　（石岡に）刑事さん、一つ質問してもいいですか？
石岡　何だ。
鹿島　あなたが結城の研究室に来た時、僕はどんなふうでしたか？
石岡　どんなふうって。
鹿島　昨日みたいに、女言葉で話してませんでしたか？
石岡　なぜそんなことを聞く。

鹿島　何となく、そんな気がするからです。教えてください。お願いします。
石岡　そこまで言うなら、教えてやろう。しかし、俺の質問に答えてからだ。
鹿島　わかりました。何でも聞いてください。
石岡　鹿島、かすみって誰だ。
竜ヶ崎　確か、結城の妹じゃないですか。昨日、こいつが結城の家に行った時、その名前を名乗ったんです。
石岡　俺はこいつに聞いてるんだ。（鹿島に）おまえとかすみはどういう関係なんだ。
鹿島　関係って言われても。大学時代に何度か会っただけです。
石岡　そのおまえが、なぜかすみの葬式に行った。
鹿島　事故の記事を新聞で見たからです。結城は妹思いだったから、落ち込んでるんじゃないかと思って。
石岡　本当にそれだけか。
鹿島　本当にそれだけです。それなのに、どうして僕なんかを選んだのか。
取手係長　選ぶって？
鹿島　（石岡に）刑事さん、聞いてください。実は今朝、僕の部屋に、手紙があったんです。（とポケットを探って）あれ、どこに入れたかな？
石岡　手紙っていうのは、これか。（とポケットから封筒を出す）
鹿島　あっ、いつの間に。
石岡　応接室に運んだ時、おまえのポケットから落ちたんだ。悪いとは思ったが、勝手に読ませてもらった。
取手係長　手紙って、誰からの？
石岡　かすみからのです。（と封筒を差し出す）

取手係長　何ですって？（と受け取る）

石岡　赤線が引いてある所を読んでください。（鹿島に）悪いとは思ったが、勝手に赤線を引かせてもらった。

取手係長　（封筒から便箋を取り出して、読む）「私は兄と直接、話がしたいんです。

鹿島　鹿島さん、お願いです。あなたの体を私に貸してください」

石岡　（石岡に）刑事さん、そこに書いてあることは本当なんでしょうか？　その手紙を書いたのは、本当にかすみちゃんなんでしょうか？

鹿島　おまえはどう思う。

取手係長　わかりません。最初は、千草が書いたのかと思いました。千草っていうのは、

石岡　僕の妹なんですけど、僕をからかおうとしたんじゃないかって。でも、その

竜ヶ崎　字は千草の字じゃない。千草の字は、男の僕より下手なんです。

取手係長　確かに、この字はキレイね。頭のいい女子大生が書いたって感じ。

石岡　人格が変わると、筆跡も変わる。そうだろう、竜ヶ崎？

竜ヶ崎　ええ。話し方から体の動きまで、すべてが変わるんです。

取手係長　二人とも、何を言ってるの？

竜ヶ崎　本では何度も読んだけど、実際に会うのは初めてだ。係長、やっぱり、夢遊病説は間違いですよ。

取手係長　じゃ、一体何だって言うの？

石岡　多重人格です。鹿島、かすみっていうのは、おまえのもう一つの人格なんだ。

　そこへ、あかり・千草がやってくる。

あかり　失礼します。

取手係長　（鹿島に）お迎えが来たようね。（あかりに）あなたが千草さんですか？
石岡　いや、彼女はこいつの同僚です。（あかりに）まさか、君が来るとは思わなかったよ。
あかり　千草ちゃんが電話をくれたんです。一緒に迎えに行ってほしいって。
千草　（石岡に）あの、兄は何をしたんでしょうか。
竜ヶ崎　友達の仕事場に押しかけて、乱暴しようとしたんです。我々が取り押さえて、事なきを得ましたが。
千草　じゃ、兄は仕事をサボって、喧嘩しに行ったんですか？
竜ヶ崎　まあ、そういうことになりますね。
千草　（鹿島に）どうしてそんなバカなことしたのよ。いい年をして。
鹿島　俺は覚えてないんだ。
あかり　私がどれだけ心配したと思ってるの？　あかりさんたちにもご迷惑をかけて。私たちのことはいいのよ。（鹿島に）でも、千草ちゃんにはちゃんと謝りなさい。いきなり警察から呼び出されて、泣きそうだったんだから。
鹿島　すまなかったな、千草。でも、俺は本当に覚えてないんだ。
千草　何が、覚えてないよ。お兄ちゃん、全然反省してないのね？
取手係長　そうじゃない。あなたのお兄さんが言ったことは本当なのよ。なぜなら――――
鹿島　刑事さん、僕はもう帰ってもいいんですか？
取手係長　ええ。
鹿島　じゃ、その手紙を返してください。
取手係長　どうぞ。（と差し出す）
鹿島　（受け取って）帰ろう、千草。
石岡　鹿島、どんな理由があるにせよ、おまえが結城を襲ったのは事実だ。三度の

あかり　目の正直ってことにならないように、くれぐれも注意しろ。
　ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。

鹿島・あかり・千草が去る。

取手係長　ショックだったでしょうね、多重人格だなんて。
石岡　係長、まさか、信じたんですか？
取手係長　え、まさか、騙したの？
石岡　いや、俺は、一つの可能性として言ったんです。全部芝居だって可能性も、もちろんある。
竜ヶ崎　しかし、多重人格って仮定すると、すべての辻褄が合います。鹿島が意識を失うと同時に、かすみの人格が目覚める。そして、行動を開始する。
石岡　じゃ、かすみの目的は何だ。なぜ結城に会いに行く。
竜ヶ崎　手紙には、話がしたいって。
石岡　話って何だ。
取手係長　そこまでは書いてなかったわね。
石岡　大体、かすみは半年前に死んだ人間だ。そんな人間が、なぜ鹿島のもう一つの人格として現れる。
竜ヶ崎　じゃ、石岡さんは全部芝居だって言うんですか？
石岡　わからない。だから、明日も鹿島を調べる。
竜ヶ崎　面通しの結果はどうだったんです。
取手係長　そうか。隣の部屋から覗いてたのよね。（石岡に）彼女たち、何て言ってた？
石岡　三人とも、違うって言ってました。あんな情けない顔じゃないって。

竜ヶ崎　とすると、少なくとも、連続窃盗犯である可能性は否定されたわけですね。
石岡　それもわからない。多重人格が本当なら、こうも考えられるだろう。連続窃盗犯は、鹿島のもう一つの人格だって。
取手係長　でも、三人とも、違うって言ったんでしょう？
石岡　人格が変わると、表情も変わる。そうだろう、竜ヶ崎。
竜ヶ崎　わかりました。石岡さんが納得するまで、鹿島を調べましょう。
取手係長　仕方ないわね。でも、殴るのはもうやめて。今度殴ったら、署長に報告するからね。

石岡・取手係長・竜ヶ崎が去る。
豊島区目白にある、結城のマンション。結城・都がやってくる。

結城　（バイオリンケースを見て）都、そのケースは何だ。
都　古河君と葉月ちゃんの。今、かすみちゃんの部屋にいる。
結城　俺は帰らせろと言ったはずだ。
都　待たせてほしいって頼まれたのよ。呼んでくるから、待ってて。
結城　都。

都が去る。結城が椅子に座る。が、すぐに立ち上がる。外に行こうとする。そこへ、都・葉月・古河がやってくる。

都　どこに行くの？
結城　（立ち止まって）別に。

都　じゃ、そこに座って。古河君と葉月ちゃんも。
葉月　結城さん。こんな時間までお邪魔して、すいません。
結城　悪いが、今日は疲れてるんだ。都、二人に帰ってもらってくれ。（と行こうとする）
古河　待ってください。（と結城の前に立ち塞がる）
結城　（立ち止まって）都。
古河　五分でいいから、時間をください。話をしたら、すぐに帰りますから。
結城　都、聞こえないのか。
都　私からもお願いします。古河君の話を聞いてあげて。彼は弁解しようなんて思ってない。ただ、あなたに謝りたいだけなのよ。
結城　謝って何になる。かすみが帰ってくるのか。
都　それはそうだけど、これ以上、彼が苦しむのを見ていられないのよ。
結城　自業自得だ。
都　そういう言い方はやめて。あれは、ただの事故だったの。彼だって、被害者なのよ。
結城　バカなことを言うな。その男は居眠り運転をしたんだぞ。
都　ほんの一瞬よ。すぐに気づいて、ブレーキをかけた。でも、雪が降ってて、スリップしたから――――
結城　じゃ、なぜハンドルを切った。電柱を避けようとした。そのまま突っ込んでいれば、助手席のかすみは助かったのに。
葉月　それは違うんです。ハンドルを切ったのは――――
古河　葉月、やめろ。
葉月　でも。

古河　俺は結城さんに謝罪しに来たんだ。言い訳しに来たんじゃない。
結城　古河君、君にとって、一番大切な物は何だ。
古河　一番大切な物？
結城　何でもいい。今、なくしたら、生きていけないもの。それは何だ。
古河　すぐには思いつきません。でも、僕はバイオリニストを目指しています。もしバイオリンが弾けなくなったら、どうすればいいか、わかりません。
結城　つまり、その手か。
古河　ええ。
結城　僕の一番大切な物は、妹だった。かすみは、僕の命よりも大切だった。
古河　すいませんでした。（と頭を下げる）
結城　その謝罪は受け取らない。僕は謝罪なんかほしくない。
古河　じゃ、僕はどうすれば。
結城　僕に許してほしかったら、その手をくれ。
都　ちょっと、何を言い出すの？
結城　（古河に）どうした。僕は、その手をくれと言ったんだ。
都　バカなことを言わないで。古河君が本気にしたら、どうするのよ。
結城　（古河に）僕の言いたいことはそれだけだ。よく考えてくれ。

結城が去る。

都　ごめんね、古河君。いつもは、あんなことを言う人じゃないのに。きっと、本当に疲れてたのよ。
古河　気にしないでください。覚悟はしてましたから。

葉月　でも、ちょっとショックだったんじゃない？
古河　ああ。やっぱり、俺は甘かった。結城さんがあそこまで怒ってるなんて、想像もしてなかった。
葉月　だから、私たちに会おうとしなかったのね。
都　でも、こうしてちゃんと謝ったんだから、あの人のことはもう気にしないで。
古河　そういうわけには行きません。
都　どうして？
古河　結城さんは「よく考えてくれ」と言いました。だから、よく考えて、返事をしないと。
葉月　古河君、まさかその手を……。
古河　わからない。だから、考えるんだ。

都・葉月・古河が去る。

九月八日朝、豊島区東長崎にある、鹿島の家。千草がやってくる。椅子に座る。そこへ、鹿島がやってくる。

鹿島　千草、トイレ、空いたぞ。入ってこいよ。
千草　いい。
鹿島　でも、ずっと待ってたんだろう？　俺、何分ぐらい入ってたのかな。
千草　三十分よ、三十分。おなかでも壊したのかと思ってノックしたら、中から聞こえてきたのは鼾の音。もう、信じられない。
鹿島　俺も、トイレで寝たのは初めてだ。起こしてくれて、ありがとう。
千草　はい。（と手を出す）
鹿島　まさか、また金を取るのか？
千草　今のはタダ。「起きろ、バカやろう！」って怒鳴っただけだから。
鹿島　じゃ、その手は。
千草　一昨日のマネージャー代と、昨日の身元引受人代。しめて、一万円になります。
鹿島　夜まで、待ってくれ。帰りに、銀行に行って、下ろしてくるから。
千草　仕方ないわね。ついでに、結城さんの家にも行ってきたら？　昨日のことを謝りに。

鹿島　でも、俺は何もしてないんだ。刑事さんは突き飛ばしたって言ってたけど、俺には記憶がないし。

千草　またその話？

鹿島　またって何だよ。

千草　お兄ちゃんの小説じゃあるまいし、そんな現実離れしたことが起きるわけないでしょう？

鹿島　おまえは、俺が嘘をついてるって言うのか？

千草　結城さんと何があったの？

鹿島　何もない。

千草　じゃ、どうして喧嘩しに行ったの。本当のことを話してよ。

鹿島　わかった。そのかわり、絶対に驚くなよ。千草、俺は多重人格かもしれないんだ。

千草　多重人格？

鹿島　俺だって、信じたくない。でも、そう考えると、何もかも説明がつくんだ。

千草　お兄ちゃん、熱でもあるんじゃない？（と額を触って）イヤだ。本当にある。

鹿島　そうか？（と額を触って）昨日、病院に行った時は、寝不足だろうって言われたんだけど。

千草　でも、顔色もひどいし。気分はどうなの？

鹿島　眠い。十時間近く寝たのに、まだ眠い。

千草　絶対に風邪だよ。今、体温計を持ってくるからね。（と行こうとする）

鹿島　でも、そろそろ出ないと、まずいんじゃないか？

千草　（時計を見て）いけない。体温計、自分で出して、計って。熱があったら、病院に行くのよ。（と行こうとする）

鹿島　トイレはいいのか？
千草　会社で行くからいい。あ、そうだ。これ、また落ちてたよ。（と封筒を差し出す）
鹿島　（受け取って）「鹿島輝男様」。また同じ字だ。
千草　私の推理を言おうか？　その手紙は、結城さんの奥さんがくれたのよ。喧嘩の原因はその手紙だったのよ。どう？
鹿島　全然違う。ひどい推理だ。
千草　やっぱり。でも、多重人格っていうのもひどいと思うよ。行ってきます。

千草が去る。鹿島が手紙を読む。

鹿島　「前略、鹿島輝男様。昨日はごめんなさい。兄が私の話を信じてくれなかったので、ついカッとなってしまったのです。もう二度とご迷惑はかけません。だから、あと一度だけ、あなたの体を貸してください」。（顔を上げて）また？　もう勘弁してくれよ。

そこへ、千草が戻ってくる。続いて、石岡がやってくる。

千草　お兄ちゃん、お客さんよ。
鹿島　刑事さん、これを見てください。（と手紙を差し出して）かすみちゃんから、また手紙が来たんです。
石岡　おまえ、今日は仕事か。
鹿島　ええ。それが何か？

石岡　俺と一緒に来い。館長には、後で俺が説明するから。
鹿島　いや、それはダメですよ。僕は昨日、遅刻した上に、無断早退までしたんです。今日は絶対に時間までに行かないと。
石岡　つべこべ言わずに、来い。（と鹿島の腕をつかむ）
千草　放してください。兄が何をしたって言うんです。
石岡　俺はこいつのためを思って、連れていくんだ。
千草　逮捕状はあるんですか？　あるなら、見せてください。
石岡　勘違いするな。俺が連れていくのは警察じゃない。病院だ。
鹿島　刑事さん、僕が風邪気味だって、よくわかりましたね。
石岡　勘違いするな。俺が連れていくのは内科じゃない。精神科だ。
千草　え？　どうして精神科なんですか？　兄の風邪は新型なんですか？

石岡が鹿島の腕をつかんで去る。後を追って、千草が去る。
西池袋大学付属病院精神科。明神先生がやってくる。本を持っている。

明神先生　（客席に向かって）じゃ、始めます。『あさえとちいさいいもうと』。「あさえがいえのまえであそんでいると、おかあさんがげんかんからでてきました。『あさえちゃん、おかあさんぎんこうにいってくるわ』。んー。俺が読むと、銀行強盗にでも行くみたいだな。（笑顔で）『あさえちゃん、おかあさんぎんこうにいってくるわ』。んー、これじゃ、白雪姫の継母だ。（女っぽく）『あさえちゃん、おかあさんぎんこうにいってくるわ』。んー、我ながら、気持ち悪い。なかなか難しいもんだな、絵本を読むのは。

そこへ、石岡が鹿島の腕をつかんでやってくる。

石岡　明神先生、おはようございます。
明神先生　（本を隠して）ああ、石岡君。今日はどうした。
石岡　先生に見てもらいたいヤツがいましてね。それにしても、相変わらず暇そうですね。
明神先生　余計なことは言わんでよろしい。
石岡　それだ。先生は顔が怖い上に、態度も厳しい。だから、患者が寄りつかないんですよ。ほら、こいつなんか、完全にビビッてます。
明神先生　（鹿島に）私が怖いか。
鹿島　え？　いや、そうですね……。
明神先生　ごまかすんじゃない。医者にとって、患者は客だ。客なら客らしく、思ったことを堂々と言いなさい。
鹿島　あの、あなたは最近、おはなし広場によく来る人ですよね？
明神先生　ああ、そうだ。実はこの年になって、娘が生まれてね。今年で四歳になる。写真があるけど、見るかね？（とポケットから写真帳を取り出す）
鹿島　ええ、ぜひ。
明神先生　（写真帳を渡して）幸い、妻に似て、非常にかわいい。
鹿島　（写真帳を開いて）本当だ。
明神先生　しかし、私は医学一筋で生きてきた男だ。娘とどうやって遊べばいいのか、まるでわからない。それで、おはなし広場で勉強しようと思ったわけだ。
鹿島　僕なんかの話が、参考になりますか？
明神先生　なる。君以外の人はうますぎて、真似のしようがない。君ぐらいがちょうど

いいんだ。しかし、昨日は大変だったな。

石岡　（鹿島に）先生はな、おまえが倒れた時、いろいろ面倒を見てくださったんだ。おまえは覚えてないだろうが。

鹿島　（明神先生に）すいませんでした。お礼を言うのが遅くなって。

明神先生　気にすることはない。（石岡に）で、彼は一体何をしたんだ。

石岡　それはまだはっきりしないんですが、実は多重人格の疑いがあるんです。

明神先生　ほう、それは珍しい。人格の数は幾つだ。

石岡　今の所は二つなんですが、その二つ目がちょっと変わってましてね。実在の人物なんです。こいつの友達の妹なんですが。

明神先生　ますますもって、珍しい。妹の年は幾つだ。

石岡　（手帳を見て）二十です。名前は、結城かすみ。音大の二年生で、専門はピアノ。そう聞くと、かなりにおしとやかなイメージが浮かぶでしょうが、性格は陽気で、スポーツ万能。特に、スキーがうまかったようです。

明神先生　今、「うまかった」と言ったな。

石岡　ええ。彼女は半年前に亡くなったんです。友達とスキーに行った帰りに、車の事故で。

明神先生　よろしい。少し話をしてみよう。

石岡　鹿島、言っておくが、明神先生は精神鑑定の権威だ。おまえがいくら嘘をついても、無駄だからな。まあ、大抵のヤツは、先生が怖くて、嘘がつけないようだが。

明神先生　鹿島君、君は寝てるね？

石岡　（鹿島の体を揺すって）起きろ、鹿島！

鹿島　（起きて）すいません。ジッとしてると、眠くなるんです。今朝もトイレの

中で眠っちゃったぐらいで。

明神先生　さっきから気になっていたんだが、やけに顔色が悪いな。（と鹿島の手を取り）熱もある。

鹿島　昨夜は早めに寝たんですが、まだ眠くて。

明神先生　それは、熱のせいだろう。

鹿島　僕はそれだけじゃないと思います。たぶん、僕が寝ている間に、かすみちゃんがこの体を使うからです。おかげで、僕はもう二日も寝てないんです。

明神先生　かすみちゃんと初めて会ったのは。

鹿島　大学一年の時です。

明神先生　向こうは幾つだった。

鹿島　小学校の一年生でした。

明神先生　場所はどこだ。

鹿島　結城の家です。夏休みに泊まりに行った時、一緒に遊んだんです。

明神先生　大学生が小学生と？

鹿島　結城とかすみちゃんは、年が十二も違うんですが、とても仲がよかったんです。僕は結城と話がしたくて行ったのに、すぐにかすみちゃんが入ってきて。結局、三人でプールに行ったり、ハイキングに行ったりしました。

石岡　鹿島、さっきの手紙を出せ。

明神先生　手紙とは？

石岡　こいつは、かすみの人格から、手紙をもらってるんです。今度のが二通目なんですが。

鹿島　（明神先生に封筒を差し出して）二枚目を見てください。その頃の思い出が書いてあります。

明神先生　（受け取って）「鹿島さん、覚えてますか。私の家にあったピアノのこと」。

鹿島　それは、アップライト型の、かなり古いピアノでした。結城の叔母さんが子供の頃に弾いていたらしいんですが、お嫁に行ってからは誰も使ってなかった。で、僕が弾いたら、かすみちゃんが喜んじゃって。

明神先生　ほう、君はピアノが弾けるのか。

鹿島　子供の時に、ちょっと習ってたんです。で、かすみちゃんも弾きたいって言うんで、教えてあげたんです。次の年に行った時は、かなり弾けるようになってて。聞いたら、ピアノ教室に通い始めたって。

明神先生　つまり、君は、かすみちゃんとピアノを出会わせた男というわけか。

鹿島　そういうことになりますね。僕はすっかり忘れてましたけど。

石岡　嘘だ。

鹿島　嘘じゃありません。この手紙を読んで、初めて思い出したんです。

石岡　おまえの人格は忘れていたかもしれない。しかし、かすみの人格は忘れてなかったんだ。そうでなければ、こんな手紙が書けるわけない。

明神先生　石岡君。君はここへ何しに来たんだ。

石岡　こいつを先生に見てもらいに。

明神先生　しかし、彼と話をしているのは君のようだが。

石岡　すいません。つい、取り調べをしてる気になっちゃって。続きをどうぞ。

明神先生　鹿島君、君はまた寝てるね？

石岡　（鹿島の体を揺すって）起きろ、鹿島！

鹿島　（起きて）すいません。寝ちゃいけないって思えば思うほど、意識が朦朧としてきちゃって。

明神先生　よろしい。今日はこれで終わりだ。（と封筒を鹿島に渡す）

石岡　え？　もう？
明神先生　結果は火を見るより明らかだからな。
石岡　本当ですか？　じゃ、やっぱり、こいつは多重人格だったんですか？
明神先生　風邪だ。とりあえず、抗生物質を出しておくから、帰りに薬局に寄りなさい。
石岡　先生、多重人格の方は？
明神先生　それは、風邪を治してからだ。（鹿島に）体がかなり弱っている。早めに治さないと、肺炎になるぞ。鹿島君、起きなさい！
鹿島　（起きて）はい！
石岡　診察は終わりだ。帰るぞ。
明神先生　ああ、鹿島君。一つ言い忘れたことがある。
鹿島　何ですか？
明神先生　君のおはなし広場は本当に楽しい。次も期待しているよ。

鹿島・石岡が去る。反対側へ、明神先生が去る。

九月八日昼、豊島区立東池袋図書館。利根川・あかり・樹里がカウンターの中で仕事をしている。虹子・かすみがそれぞれの　場所で本を読んでいる。

あかり　大昔の日本人は、月を「ツク」と発音したそうです。「ツク」を辞書で引いてみると、「ゴミが付く」「電気が点く」「嘘を吐く」「毬を撞く」「餅を搗く」といろいろ載っていますが、この場合は「霊が憑く」。月は、霊が憑く場所、魂が宿る場所と考えられていたのです。とすれば、月の光は死者の声。鹿島君にはその声が聞こえていたのかもしれません。

そこへ、葉月がやってくる。

葉月　あの、こちらに鹿島輝男さんて方はいらっしゃいますか？

あかり　ええ、いますよ。今日はまだ来てませんけど。

葉月　何時頃にいらっしゃるか、わかりますか？

あかり　さあ、何も連絡が入ってないんで。私でよかったら、伝言しておきますけど。

葉月　いいえ。直接、お話したいんで。

利根川　鹿島があなたに何かしたんですか？

葉月　いいえ、別に。

利根川　本当のことを言ってください。彼はけっして悪い人間ではないんですが、最近、おかしな行動を取るようになりまして。

あかり　館長、そういうことはあまり口にしない方がいいんじゃないですか。

葉月　（利根川に）おかしな行動って、昨日のことですか？

利根川　え？　あなた、ご存じなんですか？

葉月　昨日、鹿島さんが結城さんの家に来た時、その場にいたものですから。

利根川　その時、鹿島に何かされたんですか？　たとえば、いきなり抱きつかれたとか。

あかり　そんな人が、わざわざ会いに来るわけないでしょう？

利根川　でも、他に何がある？　まさか、鹿島君に一目惚れして、交際を申し込みに来たって言うのか？

あかり　そっちの方が、まだ可能性がありますよ。鹿島君だって、一応、男ですから。

利根川　バカも休み休み言いなさい。あんな男に惚れる女がいるもんですか。ねえ、樹里君？

樹里　私、あかりさんは鹿島さんが好きなんだと思ってました。

あかり　冗談言わないでよ。どうして私があんな男に。

利根川　いつも冷静なあかり君がうろたえてる。まさか。

あかり　やめてくださいよ、館長まで。

そこへ、鹿島・石岡がやってくる。

鹿島　すいません、遅くなっちゃって。

あかり　こんな時間まで、何してたのよ。遅刻するならするって、電話ぐらいしなさ

利根川　いよ。全くルーズなんだから。ねえ、館長？
鹿島　ありがとう。僕の言いたかったことを、全部言ってくれて。
遅刻するつもりはなかったんです。それなのに、この人に無理矢理、病院へ
連れていかれて。
利根川　（石岡に）本当ですか？
石岡　さあね。
鹿島　ひどい。「館長には、後で俺が説明してやる」って言ったくせに。
石岡　わかったよ。（利根川に）こいつは西大病院で、精神鑑定を受けてきたんだ。
鹿島　そこまで詳しく説明しなくても。
あかり　鹿島君、精神鑑定って、どういうこと？
鹿島　この人は、僕が多重人格じゃないかと思ってるんだ。
利根川　多重人格？　君の中に、いろんな人格がいるって言うのか？　遅刻しない鹿
島君とか、女の子にモテモテの鹿島君とか。
石岡　そんなことは言ってない。
利根川　刑事さん、あなた、ミステリーの読みすぎですよ。
石岡　俺だって、頭から信じてるわけじゃない。しかし、可能性はある。
鹿島　僕は、別の可能性もあると思います。
石岡　別って何だ。
鹿島　（封筒を差し出して）もう一度、この手紙を見てください。二枚目の、ピア
ノの話が書いてある所。ほら、ここです。
石岡　（受け取って）「あのピアノは、私が中三の時に壊れてしまいました」。
鹿島　最初に読んだ時は気がつかなかったけど、おかしな話ですよね？　だって、
僕が最後にかすみちゃんに会った時、彼女は小学四年だったんです。中三の

時に何があったかなんて、わかるわけないんだ。

石岡　おまえは一昨日の夜、結城の家で酒を飲んだ。その時、結城から聞いたんじゃないのか？

鹿島　聞いてない。疑うなら、結城に確かめてください。

石岡　百歩譲って、聞かなかったとしよう。それで、どんな結論が出る。

鹿島　この手紙は、かすみちゃんの人格が書いたんじゃない。かすみちゃんの霊が書いたんです。

あかり　（鹿島に）それはつまり、かすみさんの霊があなたの体に憑依したってこと？

鹿島　その通りです。

利根川　（笑って）鹿島君、君がそう信じたいのはわかる。しかし、それだけは絶対にあり得ない。

鹿島　どうしてですか。

利根川　幽霊なんて、いないからさ。

鹿島　どうして断言できるんです。憑依現象っていうのは、過去にもたくさん例があるんですよ。

利根川　樹里君、ちょっと来てくれ。

樹里　何ですか？

利根川　君はいつも言ってるよね。「私は霊感が強い」って。

樹里　ええ。私には霊が見えるんです。どうせ館長は信じないでしょうけど。

利根川　そう言わずに、君の力を貸してくれ。今、鹿島君の近くに、幽霊はいるかい？

樹里　（鹿島を見る）

石岡　（あかりに）彼女、本当に見えるの？

あかり　本人はそう言い張ってます。ここに新任で来た時、「館長の後ろに落武者が

見える」って言ったんです。それ以来、館長とは犬猿の仲で。

利根川　どうだい、樹里君？

樹里　鹿島さん、あなた、寝てますね？

石岡　（鹿島を揺さぶって）起きろ、鹿島！

鹿島　（起きて）驚いた。人間て、立ったまま寝られるんですね。

利根川　で、樹里君の答えは？

樹里　誰もいません。

鹿島　そんなはずはない。二十ぐらいの女の子がいるはずだ。

樹里　本当にいません。でも、鹿島さんのオーラ、かなり弱くなってますよ。気をつけないと、また倒れますよ。

利根川　ご苦労さま。（鹿島に）どうだ。これでもまだ幽霊が書いたって言い張るつもりか？

あかり　館長、私、遊戯室に行きます。そろそろおはなし広場の時間なんで。

利根川　いや、君は昨日、鹿島君のピンチヒッターをやったじゃないか。だから、今日は鹿島君にやってもらおう。

鹿島　でも、今日は何の準備もしてきてません。

利根川　あかり君は何を読むつもりだったの？

あかり　これですけど。（と本を渡す）

利根川　（鹿島に）よし、これを読みなさい。今日は途中で倒れるんじゃないぞ。

鹿島　その前に、顔を洗ってきていいですか？　眠くてたまらないんで。

利根川　仕方ないな。一分で戻ってくるんだよ。

鹿島が去る。後を追って、かすみも去る。

葉月　（石岡に）すいません、その手紙を見せてもらえませんか？
石岡　君は？
葉月　下妻葉月と言います。かすみの友達です。
石岡　（手帳を見て）事故が起きた時、一緒に車に乗ってた子か。なぜ君がここに？
あかり　鹿島君に会いに来たんです。昨日、彼が結城さんの家に行った時、その場にいたんですって。
石岡　（葉月に）じゃ、鹿島がかすみの人格になってる所を見たのか？
葉月　ええ。話し方がかすみそっくりでした。鹿島さんに、「葉月」って呼ばれた時、びっくりしたんです。かすみに呼ばれたような気がしたんで。
石岡　間違いない？
葉月　ええ。
石岡　結城都も同じことを言っていた。「お義姉さん」って呼ばれた時、かすみに呼ばれたような気がしたって。
葉月　いいですか、その手紙？
石岡　ああ。

そこへ、明神先生が走ってくる。

明神先生　（あかりに）おはなし広場はもう始まったかな？
あかり　もうすぐです。
利根川　鹿島のヤツ、遅いな。一分って言ったのに。
石岡　俺が見てこよう。

石岡が去る。

明神先生　今日の担当も鹿島君なのか？
利根川　ええ。今日は小学生の日ですからね。きっと大騒ぎになるでしょう。
あかり　（葉月に）どう？　その字に見覚えはある？
葉月　かすみの字によく似ています。
あかり　そう。でも、筆跡を真似することぐらい、誰だってできるのよね。

そこへ、石岡が鹿島の腕をつかんでやってくる。

鹿島　やめてよ。放してよ。
利根川　どうしました？
石岡　こいつ、洗面台に突っ伏して、眠ってやがった。（と鹿島を突き飛ばす）
鹿島　痛いなあ。刑事のくせに、乱暴すぎない？
あかり　鹿島君、顔は洗ったの？
鹿島　あ、まだだった。（利根川に）もう一度、行ってきます。（と行こうとする）
利根川　（腕をつかんで）もうダメだ。時間がない。行くよ、鹿島君。
鹿島　（振り払って）でも、途中で寝ちゃったら、まずいでしょう？
利根川　その時は、僕が水をぶっかけてやる。さあ、鹿島君。（と腕をつかむ）
鹿島　わかった、わかった。自分で歩くから、放してよ。

鹿島・利根川が去る。後を追って、明神先生が去る。

石岡　何だ、あいつ。女みたいに喚きやがって。まさか。
あかり　樹里ちゃん、今の鹿島君、見た？
樹里　いいえ、仕事をしてたんで。
あかり　もしもよ、もしも鹿島君に霊が憑依したら、樹里ちゃんにはわかる？
樹里　さあ、そういう経験はないですから。でも、さっきは本当に誰もいませんでしたよ。
あかり　（葉月に）あなたは見てた？　今の鹿島君。
葉月　似てました。怒った時のかすみに。

石岡・あかり・樹里・葉月・虹子が去る。
遊戯室。鹿島・利根川がやってくる。鹿島は本を、利根川は椅子を持っている。

利根川　（客席に向かって）お待たせしました。おはなし広場の時間ですよ。ほら、みんな、座って。
鹿島　誰も聞いてないですね。
利根川　（客席に向かって）ほら、みんな、静かにして。静かにしないと、おじさん、歌うよ。おや、急に静かになったね。じゃ、歌はまた今度ってことにしよう。さて、鹿島さん、今日は何を読んでくれるの？
鹿島　どうしても読まなくやダメ？
利根川　へえ、『いもうとのにゅういん』か。（客席に向かって）この本はとってもおもしろいんだよ。もしおもしろくなかったら、それはきっと鹿島さんのせいだね。それじゃ、鹿島さん、頑張ってね。

利根川が去る。鹿島が椅子に座る。

鹿島　（客席に向かって）じゃ、読むよ。うまく読めなくても、怒らないでね。『いもうとのにゅういん』。「あさえは、ようちえんからともだちのひろちゃんといっしょにかえってきました。にんぎょうのほっぺこちゃんであそぶやくそくだったのです」。え？　ほっぺが大きいから、ほっぺこちゃんよ。いいのよ、あだ名なんだから。「そのとき、おかあさんがあやちゃんをおんぶして、ベッドのへやからでてきました。あやちゃんはぐったりしています」。え？　あやちゃんはあだ名じゃないよ。綾子とか綾香とかいうんじゃない？「『すぐかえるから、ふたりであそんでいなさい』おかあさんとあやちゃんはいってしまいました」。だから、綾子でも綾香でもいいじゃない。君、さっきからうるさいよ。まじめに聞く気がないなら、外で遊んでなさい。「まもなくおかあさんがかえってきました。『あやちゃんが、にゅういんすることになったの』『もうちょうのしゅじゅつよ』」。さっきからうるさい君。そう、君よ。君は盲腸の手術、したことある？　ないんだ。私？　私はあるよ。小学六年の時。手術をした次の日だったかな。お兄さんがお見舞いに来て、ディスクマンをくれた。とっても大事にしてたのに。私が前からほしがってたこと、知ってたんだ。お兄さんて、いつもそう。自分のことより、私のことを考えて。

そこへ、葉月が飛び出す。

葉月　かすみ？
鹿島　私はもう死んじゃったのに、いつまでもこだわり続けて。
葉月　かすみでしょう？　あなた、かすみなんでしょう？
鹿島　お兄さんはバカよ。大バカよ！
葉月　かすみ！

鹿島が走り去る。後を追って、葉月も走り去る。そこへ石岡・利根川・樹里・明神先生が飛び出し、後を追って走り去る。そこへ、あかりがやってくる。

あかり　鹿島君は遊戯室の窓から、外へ飛び出しました。後を追って、葉月さんも。そして、私と石岡さんも。図書館の前の通りに出ると、遠くに葉月さんの後ろ姿が見えました。葉月さんは、駅の方角に向かって、走っていました。その先には、鹿島君がいるはずでした。鹿島君はかすみさんの声に導かれて、また走り出したのです。

あかりが椅子を持って去る。

九月八日昼、鉄橋大学工学部にある、結城の研究室。結城がやってくる。受話器を取る。
別の場所に、石岡が現れる。携帯電話を持っている。

結城　はい、結城です。
石岡　池袋署の石岡です。自宅にかけたんですが、留守だったんで。
結城　そうですか。で、僕に何か？
石岡　今からそちらに鹿島が行くかもしれません。くれぐれも気をつけてください。
結城　そんなことのためにわざわざ？
石岡　鹿島はあなたを襲うつもりなんだ。我々警察官には、市民の安全を守る義務がある。
結城　心配いりませんよ。喧嘩だったら、負けません。
石岡　そうですか？　昨日はかなり劣勢に見えましたけど。

結城が去る。
池袋駅近くの路上。あかりがやってくる。

石岡　結城さん？　結城さん？　クソー。勝手に切りやがった。
あかり　結城さん、何だって？

石岡　「喧嘩だったら、負けません」だと。で、鹿島は？
あかり　花屋のおばちゃんが見たって。あの人、道路に飛び出して、タクシーを止めたのよ。で、大きな声で、「上野駅まで」って。
石岡　上野駅？　あいつ、大学には行かないつもりなのか？
あかり　それはまだわからない。とにかく、後を追いかけないと。
石岡　俺の車で行こう。まさか、こんな形でデートが実現するとはな。
あかり　こんな時に、よくそんなバカなことが言えるわね。あなた、本当に刑事？

石岡・あかりが走り去る。
豊島区立池袋図書館。利根川・樹里がやってくる。樹里は本を持っている。

樹里　ひどいじゃないですか。いきなり、ピンチヒッターをやらせるなんて。
利根川　仕方ないだろう。鹿島君もあかり君もいなくなっちゃったんだから。
樹里　だったら、自分がやればいいのに。
利根川　僕は先月、八回もやったからね。今月は若い人に譲ることにしたんです。
樹里　違うでしょう？　大声を出しすぎて、近所から苦情が来たんでしょう？
利根川　ええ。「図書館が騒音を撒き散らすとは何事だ」って。僕は子供たちを喜ばそうと思っただけなのに。樹里君、携帯が鳴ってるよ。「仕事中は切れ」って、あれほど言ったのに。
樹里　この着信音は、鹿島さんのですよ。

樹里が鹿島のカバンの中から携帯電話を取り出す。別の場所に、あかりが現れる。あかりは携帯電話を持っている。

樹里　はい、鹿島です。
あかり　その声は樹里ちゃんね？　鹿島君、そこに携帯を置いていったの？
樹里　ええ、カバンごと。
あかり　どうしてすぐに出なかったの？　何度もかけたよ。
利根川　（樹里に）鹿島君か？
樹里　いいえ、あかりさんです。
利根川　（樹里の手から携帯電話を取って）あかり君、早く帰ってきてくれ。樹里君と二人きりだと、図書館の雰囲気がギスギスしてしまうんだ。
あかり　鹿島君を捕まえたら、すぐに戻ります。それじゃ。

利根川・樹里が去る。
上野駅。石岡がやってくる。

石岡　どうだった。
あかり　樹里ちゃんが出た。鹿島君、携帯は持っていかなかったのよ。
石岡　となると、残りはあの女の子か。しかし、あの子の番号はわからないし。
あかり　鹿島君を見た人は？
石岡　いない。この駅は、人が多いからな。見つけ出すのは不可能だぞ。
あかり　でも、ここに来たことは間違いないのよ。
石岡　俺たちをまくためだったとしたら。
あかり　まさか。
石岡　山手線に乗って、また池袋に戻ったのかもしれない。クソー。

石岡が携帯電話をかける。別の場所に、取手係長が現れる。携帯電話を持っている。

取手係長　はい、取手です。
石岡　石岡です。係長、至急、鉄橋大学へ行ってもらえませんか。鹿島がまた行くかもしれないんで。
取手係長　こっちはそれどころじゃないの。例の連続窃盗犯が自首してきたのよ。
石岡　やっぱり、鹿島じゃなかったのか。
取手係長　何言ってるのよ。鹿島が怪しいって言い出したのは、君でしょう？
石岡　とにかく、お願いします。あと、下妻葉月の携帯の番号を調べてください。
取手係長　下妻、何だって？
石岡　下妻葉月。結城かすみの友人です。それじゃ。

石岡・あかりが去る。
池袋警察署。竜ヶ崎がやってくる。書類を持っている。

竜ヶ崎　石岡さんからですか？
取手係長　ええ。この忙しい時に、ああしろ、こうしろって、ワガママばっかり。で、例の男は？
竜ヶ崎　連続窃盗犯に間違いないようです。これが調書です。（と書類を差し出す）
取手係長　（受け取って）一体何をしてる男だったの？
竜ヶ崎　小さな劇団で演出をしてるそうです。「なぜ被害者に文句を言ったんだ」って聞いたら、「あれはダメ出しだ」って。

取手係長　ダメ出しって何？
竜ヶ崎　さあ。もう一度、本人に聞いてみましょう。

取手係長・竜ヶ崎が去る。
上野駅の常磐線のホーム。鹿島がやってくる。後を追って、葉月がやってくる。

葉月　かすみ！
鹿島　（立ち止まる）
葉月　かすみ。どこへ行くつもり？

そこへ、あかりがやってくる。

あかり　鹿島君！

鹿島が去る。後を追って、葉月が去る。あかりも去る。そこへ、石岡がやってくる。あかりが戻ってくる。

石岡　惜しかったな。あと一歩だったのに。
あかり　悔しい！
石岡　（電光掲示板を見て）スーパーひたち。行き先は、勝田か。勝田って、何県だっけ？
あかり　茨城県。水戸市の隣。
石岡　そんな所に何しに行くんだ。クソー。

石岡が携帯電話をかける。別の場所に、千草が現れる。受話器を持っている。

千草　はい、鹿島です。
石岡　池袋署の石岡です。君のお兄さんの知り合いに、茨城県の勝田市の人はいるかい？
千草　勝田市ですか？　さあ。
石岡　よく思い出してくれ。親戚とか友達とか、片思いをしてた女の子とか。
千草　私は聞いたことがありません。大体、茨城県に勝田市って所があるなんて、今、初めて知りました。
石岡　俺もだ。ありがとう。

千草が去る。

あかり　ダメだったの？
石岡　ああ。こうなったら、俺たちも勝田市に行くか。
あかり　結城さんに聞いてみたら？
石岡　どうして。
あかり　今の鹿島君は、かすみさんだからよ。勝田市に行こうとしてるのは、かすみさんなのよ。
石岡　信じれないな。君は、鹿島が本当に多重人格だと思ってるのか？
あかり　自分で言い出しておいて、その言い草は何よ。
石岡　怒るな、怒るな。一応、聞いてみるから。

石岡が携帯電話をかける。別の場所に、結城が現れる。受話器を持っている。

石岡　池袋署の石岡です。何度も電話して、すいません。実は一つ、お聞きしたいことがありましてね。結城さんは、茨城県の勝田市って所に、何か覚えはありませんか。

結城　ない。

結城が去る。

石岡　あの野郎、また勝手に切りやがった。

あかり　ちょっと待って。スーパーひたちって、終点までノンストップとは限らないんじゃない？

石岡　そうなのか？　じゃ、どこで停まるんだ。

あかり　知らない。私も乗ったことないから。

石岡　ないのか？　茨城のことなら何でも知ってるって顔をしてたくせに。

あかり　私がいつ、そんな顔をした？

石岡　怒るな、怒るな。とりあえず、駅員に聞いてこよう。

石岡・あかりが去る。

常磐線の車内。鹿島がやってくる。後を追って、葉月がやってくる。

葉月　かすみ。

鹿島　（立ち止まる）
葉月　どうして逃げるの？　私のこと、怒ってるの？
鹿島　（首を横に振る）
葉月　じゃ、どうして。
鹿島　何だか疲れちゃって。
葉月　いきなり、おはなし広場をやらされたから？　でも、かすみの話、おもしろかったよ。
鹿島　あんなの、ヤケクソだよ。最初の三ページしか読まないで、逃げ出しちゃったし。鹿島さん、また怒られちゃうね。
葉月　本当は、お兄さんに会いに行きたかったんでしょう？
鹿島　うん。でも、行っても無駄なんじゃないかと思って。私の話、ちっとも信じてくれないし。
葉月　私は信じるよ、かすみのこと。私にできることがあったら、何でも言ってよ。
鹿島　ありがとう。
葉月　あ、ちょっと待ってて。

葉月が携帯電話を取り出す。別の場所に、石岡が現れる。携帯電話を持っている。

葉月　はい。
石岡　葉月さんか？
葉月　そうですけど。
石岡　池袋署の石岡だ。悪いが、鹿島に代わってくれ。
葉月　（鹿島に）石岡って人から。（と携帯電話を差し出す）

鹿島　（受け取って）もしもし。
石岡　教えてくれ。おまえは一体どこへ行くつもりなんだ。土浦か？

別の場所に、あかりがやってくる。鹿島・葉月が去る。石岡も去る。

あかり　茨城県土浦市には、かすみさんのご両親が住む、実家がありました。と言っても、ご両親に会いに行こうと思ったわけではないようです。気づいた時にはふるさとに向かっていた。そう、かすみさんは言いました。もちろん、その声は、鹿島君そっくりでしたが。私と石岡さんは、車で土浦市に向かいました。

あかりが去る。
土浦市にある、かすみの実家の近くの路上。都がやってくる。花束を持っている。後を追って、鹿島・葉月がやってくる。

葉月　都さん。
都　どうしたの、二人して。あなたたち、いつの間に、仲良くなったの？
葉月　都さん、この人は鹿島さんじゃないんです。かすみなんです。
都　え？
葉月　かすみの霊が、鹿島さんの体に乗り移ってるんです。本当なんです。
都　葉月ちゃん、本気で言ってるの？
葉月　ええ。
都　（鹿島に）あなた、ここへ何しに来たの？

鹿島　わからないの、自分でも。
都　私はね、かすみちゃんのお墓参りに来たの。どうしても、かすみちゃんと話がしたくなって。でも、まさか本当に話ができるとはね。
鹿島　お義姉さん、信じてくれるの？
都　（うなずく）
鹿島　お義姉さん。

鹿島が都に抱きつく。そこへ、石岡・あかりがやってくる。

石岡　鹿島、その人を放せ！

石岡が鹿島につかみ、殴る。鹿島が倒れる。葉月が鹿島に駆け寄る。

都　この人が何をしたって言うんです。
石岡　あなたに乱暴しようとした。
都　どうしてかすみちゃんが私に乱暴するんですか。
あかり　それじゃ、やっぱり、この人はかすみさんの人格になってたんですね？
葉月　違います。この人は、本当のかすみなんです。

と、鹿島がむっくりと起き上がる。

鹿島　ここは？

石岡が鹿島を抱き起こす。鹿島・石岡・都・あかり・葉月が去る。

九月八日夕、鉄橋大学工学部にある、結城の研究室。古河がやってくる。部屋の中を見回す。そこへ、結城がやってくる。

結城　ここで何をしてる。

古河　勝手に入ってすいません。結城さんを待ってたんです。

結城　君と会う約束をした覚えはないが。

古河　ええ。でも、どうしても直接、お話がしたくて。

結城　悪いが、相手をしている暇はない。十五分後に、会議が始まるんだ。

古河　じゃ、終わるまで、ここで待たせてください。

結城　うちの学部は、話好きが多くてね。だから、会議がやたらと長い。ひどい時は、日付が変わるまで続く。

古河　構いません。本でも読んで、時間を潰しますから。

結城　わからないかな。僕は迷惑だと言ってるんだ。

古河　そんなに僕の顔を見るのがいやですか。

結城　イエスかノーか、どちらか選べと言われたら、イエスだ。しかし、君はかすみの友人だった男だ。力づくで追い出すような真似はしたくない。だから、帰ってくれと頼んでるんだ。

古河　そうやって、死ぬまで僕を避け続けるつもりですか。

結城　僕はむしろ、君に避けてほしい。僕の前に、姿を現さないでほしい。
古河　僕には、謝罪する権利もないんですか。
結城　それはあるだろう。しかし、僕にはそれを拒否する権利があるはずだ。
古河　結城さん。僕は、自分のしたことをごまかすつもりはありません。かすみさんが亡くなったのは、百パーセント、僕の責任です。でも、かすみさんは僕の友達だった。僕だって、悲しいんです。
結城　それは君の勝手だ。
古河　あなたは僕にこう言いたいんですね。死ぬまで苦しめと。

そこへ、取手係長・竜ヶ崎がやってくる。

竜ヶ崎　失礼します。おや、来客中でしたか？
結城　いや、彼はもう帰るところです。
竜ヶ崎　じゃ、ちょっとお邪魔してもいいですか。
結城　申し訳ないんですが、あと十分で会議が始まるんですよ。
取手係長　ご心配なく。我々の話は五分で済みますから。
結城　本当に五分だけでしょうね？
取手係長　ええ。実は、今から二時間ほど前に、鹿島がまた行方不明になりましてね。
結城　その話なら、石岡さんから聞きました。ここに来るかもしれないから、気をつけろって。
竜ヶ崎　で、鹿島は？　ここには来ませんでしたか？
結城　知りませんよ。僕はついさっきまで、授業に行ってたから。
取手係長　本当ですか？

結城　僕が嘘をついて、何になるんです。
取手係長　ちょっと失礼。

取手係長が携帯電話を出す。別の場所に、石岡が現れる。携帯電話を持っている。

取手係長　はい、取手です。
石岡　石岡です。たった今、鹿島の身柄を拘束しました。
取手係長　え？　どういうこと？
石岡　だから、鹿島を捕まえたんですよ。
取手係長　どこで。
石岡　茨城県の土浦市、かすみの実家の近くです。
取手係長　ちょっと待ってよ。私は今、結城さんの研究室にいるのよ。
石岡　なぜ。
取手係長　君が行けって言ったんじゃない。鹿島が行くかもしれないからって。
石岡　それは、一時間も前の話でしょう。鹿島がスーパーひたちに乗った時点で、その線は消えたんです。
取手係長　どうしてすぐに知らせてくれなかったのよ。
石岡　じゃ、俺は鹿島を連れて、帰ります。

石岡が去る。

取手係長　ちょっと、石岡君！
結城　鹿島が見つかったんですか？

取手係長　ええ。茨城県の土浦市で。
竜ヶ崎　確か、結城さんの実家がある所でしたよね？　でも、なぜそんな所へ行ったんだ。
取手係長　ひょっとすると、例の病気が再発したんじゃない？
結城　お話の最中に恐縮ですが、これであなた方の用は済んだわけですよね？　僕は会議に行っても構いませんか。
竜ヶ崎　結城さん、これはあくまでも一つの可能性なんですが、鹿島には、多重人格の疑いがあるんです。
古河　多重人格？
結城　君は横から口を出すな。
竜ヶ崎　昨日、鹿島がここに来た時、女言葉を話してましたよね？　あれはどうやら、あなたの妹さんの人格らしいんです。
結城　それは何かの間違いでしょう。僕の妹は、あんなしゃべり方はしませんでしたよ。
竜ヶ崎　本当のことを言ってください。あなたと鹿島の間で、一体何があったんです。
結城　鹿島はなぜあなたにつきまとうんです。
取手係長　それは本人に聞いてみてください。じゃ、会議の準備があるんで。
竜ヶ崎　すいませんでしたね、お時間をとらせて。竜ヶ崎君。
（結城に）あなたは何かを隠してる。それは、僕らに知られてはまずいことなんですか？
取手係長　竜ヶ崎君。
竜ヶ崎　わかりましたよ。（結城に）お邪魔しました。

取手係長・竜ヶ崎が去る。

結城　（古河に）君も帰ってくれないか。
古河　結城さん、刑事さんたちが言ったことは本当かもしれませんよ。僕も昨日、結城さんの家で、鹿島さんに会ったんです。その時は気づかなかったけど、かすみさんみたいなしゃべり方をしてました。
結城　冗談だよ。君はからかわれたんだ。
古河　でも、僕のことを、古河君て呼んでました。
結城　そうか。君もあいつらの仲間ってわけか。
古河　あいつらって？
結城　とぼけるな。都と鹿島に決まってるだろう。最初にやろうと言い出したのは誰だ。都か。それとも、君か。
古河　一体何の話です。
結城　ここへ来たのも、鹿島の話をするためか。鹿島の芝居を、僕に信じさせるためか。
古河　違います。昨日の返事をするためです。
結城　昨日の返事？
古河　結城さん、言ったじゃないですか。「僕に許してほしかったら、その手をくれ」って。
結城　そうか。もう決心したのか。（とカッターを差し出して）さあ、これで切りたまえ。今、ここで。
古河　待ってください。
結城　何だ。怖じ気づいたのか？

古河　違います。僕には、自分の手は切れない。そんな勇気はありません。だから、かわりに音楽をやめます。二度とバイオリンは弾きません。それで許してもらえませんか。お願いします。

結城　死ぬまでバイオリンを弾かないだと？

古河　本当です。約束します。

結城　そんな約束が信用できると思ってるのか。

結城が古河の手をカッターで切る。古河が叫び、倒れる。

結城　自分で切れないなら、俺が切ってやる。さあ、手を出せ。

結城が古河に切りかかる。古河が避け、転がる。そこへ、取手係長・竜ヶ崎がやってくる。

竜ヶ崎　結城、やめろ！

竜ヶ崎が結城につかみかかる。結城がカッターを振る。竜ヶ崎が避ける。結城が走り去る。後を追って、竜ヶ崎が走り去る。取手係長が古河に駆け寄る。

取手係長　大丈夫？

古河　ええ。

取手係長が古河を抱き起こす。取手係長・古河が去る。

土浦市にある、海音寺の境内。石岡がやってくる。携帯電話で話している。そこへ、あかりがやってくる。石岡が電話　を切る。

あかり　誰から？
石岡　俺の上司からだ。鹿島たちは？
あかり　かすみさんのお墓。三人で草むしりをしてる。
石岡　落ち着いて、聞いてくれ。結城が古河をナイフで刺した。
あかり　え？
石岡　場所は、鉄橋大学の、結城の研究室。たまたま、俺の上司が近くにいて、叫び声を聞いて、駆けつけたらしい。
あかり　古河って誰？
石岡　かすみの友達だ。事故の時、車を運転してたヤツだ。
あかり　その人、死んだの？
石岡　死んでない。刺されたのは、右手だけだったんだ。ただし、傷が深いんで、すぐに西大病院に運ばれたそうだ。
あかり　結城さんは？
石岡　逃げた。竜ヶ崎が後を追ってるが、まだ捕まらないらしい。詳しい事情は、車の中で話す。鹿島たちを呼んできてくれ。

鹿島・あかりが去る。
西大病院の非常階段。取手係長がやってくる。携帯電話を持っている。別の場所に、竜ヶ崎が現れる。携帯電　話を持っている。

竜ヶ崎　すいません、逃げられました。
取手係長　一人じゃ、しょうがないわ。で、今、どこにいるの。
竜ヶ崎　池袋駅です。結城は有楽町線に乗りました。俺も乗ろうとしたんですが、その直前にドアが閉まって。鼻を挟まれました。
取手係長　すぐに、抜けた？
竜ヶ崎　いいえ、三十メートルほど、横向きで走りました。ホームは爆笑の渦でした。
取手係長　市民に笑いを提供するなんて、公務員の鑑ね。じゃ、君はすぐに結城の家に行って。
竜ヶ崎　一人でですか？
取手係長　被害者の証言によると、結城は手を切ろうとしただけなんだって。つまり、殺意はなかったってわけ。
竜ヶ崎　しかし、結城は俺まで切ろうとしたんですよ。
取手係長　逃げようとして、カッターを振り回しただけじゃない。この程度の事件で、大騒ぎすることもないでしょう。
竜ヶ崎　石岡さんはこっちに向かってるんですよね？
取手係長　ええ。あと一時間ぐらいで、戻ると思うけど。
竜ヶ崎　じゃ、戻ってきたら、こっちに寄越してください。
取手係長　一人じゃ、心配？
竜ヶ崎　いつもだったら平気なんですが、俺は鼻を負傷してるんで。
取手係長　わかった、すぐに行かせる。でも、その前に、結城が現れたら、一人で何とかするのよ。

取手係長・竜ヶ崎が去る。

豊島区目白にある、結城の家。鹿島・あかりがやってくる。

鹿島　結城？　結城？
あかり　いないみたいね。結城さん、あくまでも逃げるつもりかな。
鹿島　あいつはそこまでバカじゃない。逃げても無駄だってことはわかるはずです。
あかり　そうよね。相手も大した怪我じゃなかったんだし。
鹿島　ひょっとすると、もう自首したのかもしれない。石岡さんに電話して、聞いてみましょう。

そこへ、竜ヶ崎がやってくる。

竜ヶ崎　おまえら、どうやって、中に入った。
鹿島　結城の奥さんに、鍵を借りてきたんです。不法侵入じゃありません。
竜ヶ崎　ここに何の用だ。
あかり　結城さんを探しに。でも、まだ帰ってきてないみたいですよ。
竜ヶ崎　知ってる。俺は一時間も前から、張り込んでるんだ。この部屋の電気が点いてるを見たら、結城はすぐに逃げる。頼むから、出ていってくれ。
鹿島　張り込みはどこで？
竜ヶ崎　マンションの斜め前に、車が停めてある。
鹿島　じゃ、僕らも一緒に張り込ませてください。お願いします。

鹿島・あかり・竜ヶ崎が去る。
西大病院の廊下。石岡・都・葉月がやってくる。反対側から、取手係長がやってくる。

石岡　係長、被害者の容体は？
取手係長　右手の掌を十二針縫った。でも、出血がひどかったのと、精神的なショックとで、しばらく動けそうもないみたい。
石岡　じゃ、ひとまず、入院ですか？
取手係長　たぶんね。まあ、一晩寝れば、元気が出るでしょう。
都　ご迷惑をかけて、申し訳ありません。
取手係長　いや、正直言って、驚きました。私は事件の直前に、ご主人と話をしたんですよ。その時は、おかしな様子はなかったんですが。
葉月　古河君には会えますか？
取手係長　ええ。でも、今は眠ってるわよ。
葉月　構いません。とにかく、顔が見たいんで。
都　葉月ちゃん、私も行く。（石岡に）主人のこと、よろしくお願いします。

都・葉月が去る。

取手係長　自分の旦那があんなことをするなんて、思ってもいなかったでしょうね。
石岡　ええ。しかし、かすみは知ってたんですよ。
取手係長　え？
石岡　かすみは結城が何をしようとしているか、知っていた。だから、鹿島の体を借りて、止めようとしたんです。

石岡・取手係長が去る。

九月八日夜、豊島区東長崎にある、鹿島の家。鹿島・あかりやってくる。

鹿島　千草！　千草！

あかり　やっぱり、まだ帰ってないみたいね。お友達とお酒でも飲みに行ってるんじゃない？

鹿島　でも、もう十一時ですよ。嫁入り前の娘が、何を考えてるんだ。

あかり　お父さんとお母さんがいない間に、羽を伸ばしたいのよ。一晩ぐらい、大目に見てあげたら？

鹿島　ダメです。僕には兄として、妹を監督する責任がある。千草が帰ってきたら、こう言ってやりますよ。「親父に言いつけるぞ」って。

あかり　じゃ、私は帰るね。

鹿島　すいませんでした。こんな時間まで、付き合わせちゃって。

あかり　いいって、いいって。張り込みなんて、滅多に経験できることじゃないし。

鹿島　結城が帰ってくるまで、待つつもりだったのに。あの刑事さん、どうしていきなり怒り出したんですか？

あかり　それは、君が居眠りをしたからよ。

鹿島　すぐに起こしてくれればよかったのに。

あかり　ちょっと期待しちゃったのよ。また、かすみさんが憑依するんじゃないかっ

て。でも、いくら待っても、ピクリともしなかった。
久しぶりにたっぷり寝たような気がします。疲れもかなり取れたし。
鹿島　でも、どうして憑依しなかったのかな。
あかり　ひょっとして、まだ土浦にいるんじゃないですか？　ほら、あの車には、僕とあかりさんと石岡さんと都さんと葉月さんと、五人も乗ったでしょう。だから、かすみさんの乗るスペースがなかったんですよ。
鹿島　でも、霊なら空ぐらい飛べるんじゃないの？
あかり　そうか。じゃ、やっぱり、今はこの部屋の中に？
鹿島　それは、寝ればわかるわよ。じゃ、おやすみなさい。

あかりが去る

鹿島　（周囲を見回して）かすみちゃん、いるの？　いても、返事はできないか。でも、もしいるなら、聞いてよ。君の気持ちは、葉月さんから聞いた。結城が何をしようとしていたかも。でも、結城は失敗した。古河君には二度と手出しできない。だから、もう心配しなくていいんだ。

そこへ、結城・千草がやってくる。結城は千草の首にナイフを当てている。

結城　誰に向かって、話をしてる。
鹿島　結城。
結城　来るな。来たら、おまえの妹の首を切る。
鹿島　やめろ、結城。千草が何をしたって言うんだ。

結城　別に何も。ただ、どうしてもおまえに聞きたいことがあってな。
鹿島　俺に？
結城　古河は今、どこにいる。
鹿島　おまえ、まだ諦めてないのか？
結城　何を。
鹿島　古河君を殺すことをだ。
結城　俺は古河の手がほしいだけだ。
鹿島　隠しても無駄だ。半年前、事故が起きた直後、おまえは古河君のいた集中治療室に忍び込んで、機械を止めようとした。
結城　そんな話、誰に聞いた。
鹿島　葉月さんに。
結城　デタラメだ。あいつはその時、別の病室にいた。頭を強く打って、動ける状態じゃなかった。
鹿島　おまえを見たのは、葉月さんじゃない。かすみちゃんなんだ。葉月さんは、かすみちゃんから、その話を聞いたんだ。
結城　鹿島、それ以上、くだらない冗談を言うな。
鹿島　おまえがスイッチに手を伸ばしたが、すぐには切らなかった。かすみちゃんには、迷っているように見えたそうだ。そこへ、当直の看護婦が来た。おまえは「部屋を間違えた」と言って、外に出た。それを見たかすみちゃんは、こう考えた。「お兄さんは古河君を殺すつもりだ。何が何でも、止めなくちゃ」って。それで、半年の間、おまえを見張ってたんだ。
結城　やめろ、鹿島。
鹿島　半年の間、おまえは何もしなかった。しかし、古河君が会いたいと言ってき

たら、すぐにナイフを買った。そのナイフだ。

結城　やめろ。

鹿島　かすみちゃんの気持ちをわかってやれ。かすみちゃんは、おまえを人殺しにしたくないんだ。だから、俺や都さんに憑依したんだ。

結城　憑依だと？

鹿島　そうだ。おまえが信じたくない気持ちはわかる。しかし、かすみちゃんの霊は本当にいるんだ。きっと、今もこの部屋の中に。

結城　鹿島、俺がこの子を殺したら、おまえは俺を許すか。

鹿島　古河君はかすみちゃんを殺したわけじゃない。あれは事故だったんだ。

結城　古河は電柱に衝突する直前にハンドルを切った。自分が助かりたくて、かすみを身代わりにしたんだ。

鹿島が結城に飛びかかり、腕をつかむ。結城が鹿島を殴る。鹿島はよろけるが、再び、結城に飛びかかる。結城が鹿島の手を切る。鹿島がひざまずく。

千草　お兄ちゃん！（と駆け寄る）

鹿島　心配するな。ちょっと切れただけだ。

結城　（笑う）

千草　何がおかしいの。あなた、自分がしたこと、わかってるの？

結城　鹿島、おまえは今、何をした。妹を守るためなら、死んでもいい。そう思って、俺に飛びかかったな？

鹿島　俺は千草を守ろうとしただけだ。

結城　俺も同じことがしたいだけだ。

鹿島　同じじゃない。でも、かすみちゃんは死んだんだ。おまえが何をしても、かすみちゃんは戻ってこないんだ。

結城　かすみが生まれてから、まだ一年も経たない頃だ。俺はかすみと二人で留守番をした。両親はかすみを連れていこうとしたが、俺が面倒を見るって言い張ったんだ。ところが、夕方になって、突然、かすみが泣き出した。オシメを替えても、ミルクを飲ませても、泣き止まない。いや、泣き声はどんどん激しくなっていく。パニックになった俺は、かすみを風呂場に閉じ込めた。ハイハイしかできないかすみは、風呂場の中でさらに泣いた。俺はテレビの音をデカくして、必死で画面に集中しようとした。しばらくして、泣き声が聞こえなくなった。風呂場を覗いてみると、かすみが頭から血を流して、倒れていた。浴槽の縁でつかまり立ちをして、後ろに倒れたんだ。かすみは頭を十二針縫った。一歳にもならない赤ん坊が十二針だ。

鹿島　おまえには、かすみちゃんを傷つけるつもりはなかった。

結城　ああ、なかった。その代わり、かすみなんかいなくなればいいと思ってた。

鹿島　そんなの、本気じゃなかった。

結城　あの時、俺はかすみを守るって決めた。死ぬまで守るって決めたんだ。鹿島、古河はどこの病院にいる。

鹿島　俺が答えると思うか？

結城　そうか。それなら、自分で調べるだけだ。

結城が走り去る。

鹿島　結城！

千草　お兄ちゃん、傷の手当てをしないと。
鹿島　そんなことをしてる場合じゃない。

鹿島が電話をかける。別の場所に、石岡が現れる。携帯電話を持っている。

石岡　はい、石岡です。
鹿島　僕です。鹿島です。今、自宅に帰ってきたら、結城がいたんです。
石岡　おまえを待ち伏せしてたのか？
鹿島　ええ、妹を人質にして。でも、妹は無事です。
石岡　おまえは。ナイフで切られたりしてないだろうな？
鹿島　ちょっとだけ。それより、結城はそっちに行くと思います。気をつけてください。
石岡　わかった。後のことは俺に任せて、おまえはゆっくり休め。

石岡が去る。

鹿島　そんなわけには行かないよ。そうだろう、かすみちゃん？（と走り出す）
千草　お兄ちゃん、どこに行くの？

鹿島が走り去る。後を追って、千草が走り去る。
西池袋大学付属病院の廊下。都・葉月・古河がやっている。古河は右手に包帯を巻いている。反対側から、取手係長がやってくる。

取手係長　どうしました？
葉月　古河君が家に帰るって言ってるんです。
取手係長　こんな時間に？
葉月　私は、無理しないで、朝まで寝てなさいって言ったんですけど。
古河　大丈夫だよ。手は多少痛むけど、こうして歩けるんだし。
取手係長　今にも転びそうじゃないの。やっぱり、今夜は泊まっていきなさい。
都　私も止めたんですけど、自分の家の方が落ち着くって言うんです。私が送りますから、許可をください。
取手係長　困りましたね。

そこへ、竜ヶ崎がやってくる。

竜ヶ崎　係長、ちょっと来てください。
取手係長　何かあったの？
竜ヶ崎　今、表の門の所で、事故があったらしいんです。中に入ろうとした車が、門にぶつかった。すぐに逃げたそうですが。
取手係長　その車に、結城が？
竜ヶ崎　結城の車は大学の駐車場で押さえたんですが、レンタカーを借りた可能性もあります。
取手係長　すぐに手配した方がいいわね。（古河に）あなたは病室に戻って。私が戻ってくるまで、絶対に外に出ないで。

取手係長・竜ヶ崎が去る。

葉月　結城さん、ここへ来るつもりだったのかな。
古河　ああ。僕に会うつもりだったんだろう。
葉月　何のために？
古河　結城さんはまだ、これを手に入れてないから。（と右手を示す）
葉月　やめてよ、そんなこと言うの。
都　大丈夫よ。あの人は、きっと刑事さんたちが捕まえてくれる。私たちは病室に戻りましょう。

そこへ、結城がやってくる。

結城　待て。
葉月　結城さん。
都　（結城に）ここに何しに来たの。
結城　俺は古河に話がある。そこをどけ。
都　その前に、私と話をして。
結城　また、かすみのフリでも始めるつもりか？　おまえたちの猿芝居には、いい加減、飽き飽きした。怪我をしたくなかったら、黙ってろ。
葉月　結城さん、都さんはかすみのフリをしたんじゃないんです。かすみの霊が憑依したんです。
結城　何が霊だ。何が憑依だ。全部、都が書いたシナリオだろうが。
葉月　違います。全部、本当のことなんです。
結城　黙れ。

葉月　いいえ、黙りません。かすみは、お兄さんを助けたいって言いました。自分のために、罪を犯してもらいたくないって。かすみの気持ちを、わかってやってください。

結城　黙らないなら、おまえを先に切るぞ。

葉月　事故の時、ハンドルを切ったのは、古河君じゃないんです。先に気づいたかすみが、横から手を伸ばしたんです。かすみは、古河君に殺されたんじゃない。古河君を助けようとしたんです。

結城　切ると言ったのが、聞こえなかったようだな。

結城が葉月に歩み寄る。都が結城の手をつかむ。結城が都を突き飛ばす。

葉月　都さん！

結城　古河、女二人に守られて、情けないとは思わないのか。

古河　結城さん、あなたはまだ僕を許してくれないんですか。

結城　おまえはかすみが好きだったか。

古河　え？

結城　かすみが好きだったかと聞いたんだ。答えろ。

古河　好きでした。僕にとっては、大切な友達でした。

結城　友達か。そう言うだろうと思ってた。かすみの気持ちには気づいていたか。

古河　ええ。

結城　しかし、おまえは気づかないフリをした。かすみの気持ちを受け取ろうとはしなかった。

都　それは仕方ないことじゃない。

結城　何だと？

都　どんなに好きになっても、結ばれないことはある。それは仕方ないことなのよ。かすみちゃんだって、それはわかっていた。わかっていたけど、好きだった。だから、ハンドルを切ったのよ。

結城　なぜかすみがこんなヤツのために死ななければならないんだ。

都　かすみちゃんが、そう望んだからよ。

結城　それも仕方ないことだと言うのか。

古河　自分が死ぬべきだった。僕はそう思っています。

結城　だったら、今、死ね。このナイフで、心臓を刺せ。

結城が古河にナイフを突き出す。そこへ、鹿島・石岡が飛び出す。

鹿島　結城！

石岡　やめろ、結城。そのナイフをこっちに寄越せ。

結城　向こうへ行け。

石岡　ナイフを捨てるんだ。早く。

結城　おまえらに用はない。向こうへ行け。

鹿島　刑事さん、僕を殴ってください。早く！

石岡が鹿島を殴る。鹿島が倒れる。

石岡　鹿島。

鹿島が起き上がる。

鹿島　お兄さん、やめて。

結城　黙れ、鹿島。

鹿島　何回言えばわかるの？　私はかすみなの。

結城　違う。おまえはかすみじゃない。

鹿島　お義姉さんも葉月も信じてくれたのに、どうしてお兄さんは信じてくれないの？

結城　俺はかすみが生まれた時から知ってる。ハイハイをするのも、つかまり立ちをするのも、ヨチヨチ歩きをするのも見てる。初めて、お兄さんと言った時も覚えてる。かすみのことなら、何でも知ってる。おまえは絶対にかすみじゃない。

鹿島　私は小学六年の時、盲腸の手術をした。手術の次の日、お兄さんはお見舞いに来てくれた。

結城　それがどうした。

鹿島　お兄さんは私にディスクマンをくれた。とっても大切にしてたのに。私が前からほしがってたこと、知ってたんだ。

結城　かすみが都に話したんだろう。おまえが知っていても、不思議じゃない。

鹿島　それなのに、私はもらったその日に、ディスクマンを壊した。お茶をこぼして、ビショビショにしちゃったの。でも、お兄さんは怒らなかった。「火傷しなかったか」って、それだけ。

結城　その時、かすみが聞いていた曲は。

鹿島　お兄さんの大好きな曲。ビートルズの『ミスター・ムーンライト』。

結城　かすみのヤツ、そんなことまで話したのか。
鹿島　お義姉さんは知らない。だって、私は話してないから。
結城　本当か、都。
都　ええ。
鹿島　お兄さん、もう終わりにして。これ以上、古河君を傷つけても、私が生き返るわけじゃないんだから。私のなんかのために、お兄さんの人生を台無しにしないで。
結城　俺はかすみを守るって決めたんだ。
鹿島　お兄さんは私を守ってくれた。二十歳になるまで、ずっと。自分のことより、私のことを考えて。私が死んでも、私のために生きようとしてくれた。でも、もういいの。
結城　俺はかすみを守りきれなかった。
鹿島　でも、私は幸せだった。お兄さんがいてくれたから。これからは、お兄さんが幸せになって。ね？

鹿島が結城のナイフをつかむ。結城がナイフを放し、ひざまずく。都が結城に駆け寄る。そこへ、取手係長・竜ヶ崎がやってくる。

取手係長　石岡君、結城は？
石岡　もう大丈夫です。こいつが説得してくれたんで。
竜ヶ崎　結城さん、署までご同行願えますか？
都　私も一緒に行きます。
取手係長　構いませんよ。（石岡に）じゃ、後はよろしく。

都　鹿島さん、ありがとうございました。

結城を抱き起こす。結城・都・取手係長・竜ヶ崎が去る。

古河　かすみ。

鹿島　ごめんなさい。僕は鹿島です。

古河　え？　じゃ、今のは？

鹿島　（石岡に）あなたがちゃんと殴ってくれなかったから、失神できなかったんだ。

葉月　やっぱり、かすみじゃなかったんですね。そうだと思った。

古河　おまえ、気づいてたのか？

葉月　だって、さっきのディスクマンの話、私がしたんだもの。

古河　どうしておまえが知ってたんだ？

葉月　電車の中で、かすみに聞いたの。で、帰りの車の中で、鹿島さんに話したの。

石岡　俺はすっかりかすみだと思ってた。しかし、よくあれだけの芝居が即興でできたな。

鹿島　かすみちゃんだったら、なんて言うだろう。それだけしか考えてませんでした。でも、途中でわけがわからなくなって。これでよかったのかな、かすみちゃん？　僕は君の力になれたのかな？

鹿島・石岡・葉月・古河が去る。

九月九日朝、豊島区立東池袋図書館。利根川・あかり・樹里がカウンターの中で仕事をしている。虹子・かすみがそれぞれの　場所で本を読んでいる。

あかり　万葉集に、こんな歌があります。「天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ」。確かに、三日月は船の形に似ています。死んだ人の魂は、月へ行く。だから、月はだんだん丸くなる。そして、満月になると、月はいっぱいになった魂を太陽に運ぶ。運び終えると、また三日月になる。月は魂を運ぶ船なのです。魂はみんな、光のもとへ帰るのです。

樹里があかりに歩み寄る。

樹里　ねえねえ、あかりさん。鹿島さんのことなんですけど。

あかり　鹿島君なら、今日も遅刻よ。また病院に寄ってくるって。

樹里　それなら、ちょうどいいや。鹿島さん、昨日、カバンを置いていったじゃないですか。その中にノート・パソコンがあったんで、ちょっと覗いてみたんですよ。

あかり　鹿島君に黙って？　ダメじゃない、そんなことしちゃ。

樹里　どんな小説を書いてるか、気になったんですよ。そうしたら、おかしなこと

あかり　が書いてあって。
樹里　おかしなことって？
あかり　これなんですけど。（とノート・パソコンを示す）
利根川　え？　このパソコンなの？　どれどれ？（とノート・パソコンを見る）
樹里　こらこら、仕事中に何をやってるんだ。樹里君はともかく、あかり君まで。
利根川　「樹里君はともかく」って、どういう意味ですか？
「どうせいつものことだけど」って意味ですよ。そう言われたくなかったら、仕事をしなさい。文句を言う前に。

そこへ、石岡がやってくる。本を一冊、持っている。

石岡　（あかりに本を差し出して）これ、返却。
あかり　（受け取って）はい。
石岡　その本は、一昨日のヤツより、さらに落ちるな。最初の十ページで、犯人がわかるし。
あかり　そうでしょう。この人の中でも、一番の失敗作って言われてますから。
石岡　そんな本を勧めやがったのか。で、ミステリーっていうのは当たり外れが激しいから、今日はジャンルを変えてみようかと思ってね。
あかり　（本を差し出して）はい。
石岡　え？
あかり　時代小説です。しかも、私の一番のお気に入り。
石岡　そうそう。たまには時代小説でも読んでみようかと思ってたんだ。ありがとう。（と受け取って）で、しつこいようだけど、今夜、食事でもどう？

あかり　いいですよ。
石岡　え？　本当か？
あかり　樹里ちゃん、石岡さんが今夜、食事に行こうって言ってるんだけど、樹里ちゃんも行く？
樹里　行きます、行きます。
利根川　（石岡に）仕方ないな。今夜は遅くなるって、家内に電話してきます。
石岡　樹里ちゃんはともかく、あんたは来なくていい。
利根川　樹里君、今の「樹里ちゃんはともかく」は、「まあ、一応、女だから」って意味です。
石岡　解説しなくていい。

そこへ、鹿島がやってくる。マスクをしている。

鹿島　（モゴモゴと）おはようございます。
あかり　鹿島君、どうしたの、そのマスク。
鹿島　（モゴモゴと）今朝起きたら、熱が三十八度もあって。
あかり　何を言ってるのか、全然わからない。
鹿島　（マスクを取って）今朝起きたら、熱が三十八度もあって。病院に行ったら、これは完全に風邪だって。
あかり　（鹿島の額を触って）イヤだ。本当にひどい熱。
利根川　（鹿島の額を触って）うん、確かに。
あかり　下手をしたら、三十九度近くありますよ。（鹿島に）こんな状態で、どうして来たの。家に帰って、寝ればよかったのに。

鹿島　でも、僕は昨日も一昨日も、ろくに仕事をしてないから。
利根川　確かに、君は仕事をしてない。この二日間で、わずか十五分です。しかし、それは君のせいじゃない。
あかり　（鹿島に）かすみさんのために走り回って、疲れがドッと出たのよ。今すぐ、家に帰りなさい。
鹿島　その前に、これを見てください。（と封筒を差し出す）
あかり　（受け取って）何よ、これ。
石岡　（鹿島に）三通目の手紙か？
鹿島　石岡さん、来てたんですか？
石岡　何て書いてあった。かすみは昨夜、あの場にいたのか？
鹿島　ええ。
あかり　「前略、鹿島輝男様。昨夜は本当はありがとうございました。私には兄を止めることができなかった。むしろ、燻っていた兄の心に、火をつけてしまった。その火を消すことができたのは、鹿島さん、あなたが本気で兄を助けようとしてくれたからです。やっぱり、あなたに頼んでよかった。半年前のお葬式の時、あなたはわざわざ土浦まで来てくれた。兄を励ますために、駆けつけてくれた。兄は強い人です。何でも一人でできてしまう人です。そのせいか、友達と呼べるような人がいません。兄の知り合いで、私のお葬式に来てくれたのは、鹿島さん一人でした。鹿島さんの言うことなら、兄も聞いてくれるかもしれない。私はそう思ったのです。本当に、あなたに頼んでよかった。これで、安心して、旅立つことができます。最後に一つだけ、ワガママを言わせてください。兄を、どうか許してあげてください。兄は強い人だけど、同時にとても淋しがりやなのです。兄はたぶん、とても淋しかったので

す。さようなら。結城かすみ」。

石岡　（鹿島に）この手紙、借りてっていいか。

鹿島　事件の証拠品にするんですか？

石岡　バカ。こんなもの、裁判官が信じると思うか。結城に見せてやるんだよ。これを見れば、もう一度、一からやり直そうって思うだろう。

鹿島　そういうことなら、喜んで。ついでに、他の二通も持っていってください。

樹里　えーと、カバンはどこだっけ。

鹿島　ここですよ。（とカバンを差し出して）昨日、置いていったでしょう？

樹里　そうだった、そうだった。（と受け取って）あれ？　ノート・パソコンが入ってない。

鹿島　すいません。勝手に出して、見てました。

樹里　え？　まさか、僕の小説を読んだの？

鹿島　そうしようと思ったら、おかしなことが書いてあって。

樹里　（ノート・パソコンを見て）「お兄さんへ」。結城への手紙だ。

あかり　かすみさんが書いたのね？

樹里　やっぱり、そうですか。幼稚園の頃から二十歳になるまでの思い出が、何十ページも書いてあるんですよ。でも、書いたのは女の人みたいだから、変だと思ってたんです。

鹿島　そうか。僕への手紙は一時間もあれば書ける。それ以外の時間は、これを書いてたんだ。石岡さん、これ、すぐにプリントアウトします。僕への手紙と一緒に、結城に渡してください。

石岡　ああ。

かすみが去る。

利根川　鹿島君、かすみさんて、どんな子だったの。写真は持ってないの？
鹿島　残念ながら、一枚も。
石岡　写真なら、あるぞ。
利根川　本当ですか？
石岡　調書を作るのに、必要になるかもしれないと思って、都さんから借りてきたんだ。（とポケットから写真を出して）ほら。
利根川　（写真を取って）へえ。この子か。樹里君と違って、優しそうな子だな。
樹里　あっ！
利根川　何ですか、いきなり。
樹里　ちょっと貸してください。

樹里が虹子に歩み寄る。

樹里　ねえ、あなた、この子、知ってるでしょう？（と写真を差し出す）
虹子　（写真を見て）いいえ。
樹里　嘘よ。いつも一緒に来てるじゃない。
虹子　私はいつも一人ですけど。
樹里　そんなことない。今日だって、一緒に来て、この席に座って。たった今、先に帰ったじゃない。
虹子　その席は、誰も座ってませんでしたよ。
樹里　あかりさんは見てましたよね？　鹿島さんは？　館長は？

利根川　見てないよ、そんな人は。
あかり　館長、その人はきっと――――
鹿島　（外に向かって）かすみちゃん、さよなら！　さよなら！　さよなら！

鹿島が大きく手を振る。が、急に咳き込む。あかりが背中をさする。鹿島がノート・パソコンに歩み寄り、画面を見る。石岡・あかり・利根川・樹里も見る。みんなが笑う。月が昇る。月の光に照らされて、かすみの影が浮かび上がる。影は揺れている。きっと彼女も笑っているのだ。

＜幕＞